

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A descriptive research on the “toritate” forms
suffixed with “mo”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 太郎, TAKAHASHI, Tarō メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001059

「も」によるとりたて形の記述的研究

高橋 太郎

はじめに	2
I かたちづくり	3
0. “接続”と“かたちづくり”	3
1. 名詞	7
2. 動詞	9
3. 形容詞	12
4. 副詞	13
5. 後置詞	14
6. コピュラ	15
II 用法	15
0. “意味”, “機能”と“用法”	15
1. 他と同類であることの提示	16
1-1. この用法と機能	17
1-2. この用法の下位区分	20
2. 含蓄をこめた文の主題提示	25
3. 極端例の提示	30
4. つよい否定的主張	31
5. 数量名詞・ていど副詞による全面否定	33
6. 一対の語による代表的提示	34
7. 不定称の語をふくむ一対の語による代表的提示	36
付. 不定称の語のとりたて形からの派生	37
8. 強調	39
9. おおよそそのていどの例示	42
10. その他の用法	44
1) 副詞のとりたて形のうちのあるもの	44
2) 「～のひとつも」という表現	45
3) 名詞の「も」によるとりたて形と形容詞のくみ あわせ	45
4) 句・節・文のパターンとして位置づけなければ ならないもの	46

おわりに	47
注	48
資 料	50
引用文献	51

はじめに

「あめもふる」「ふりもする」などの「も」は、従来の国文法では、“助詞”として一語あつかいにされてきた。しかし、この「も」は、語彙の意味をもたず、また、独立では文の構成要素とならず、名詞なり動詞なりの語形をつくるための文法的な接辞にすぎない。^{注1)} 松下大三郎 1924「標準日本文法」は、いわゆる“助詞”を“念詞”(単語)の材料である“原辞”(形態素)の一種とみ、助詞のくっついたものを単語の語形とみた。

松下 1924 は、“品詞の一般的偶性”の章で、いわゆる“係助詞”、“副助詞”のついたかたちを“連用的詞の提示格”としてとらえ、さらに、そのうちの、「は」のつくもの(分説)と「も」のつくもの(合説)を“題目格”として、それらのつかない“非題目格”と対立させた。つまり、松下は、「酒をも」「酒にも」「主人も」「泣きても」「速くも」「傲然とも」などを、それぞれひとつの語形としてとらえたのである。

松下は「ふりもする」などを単位としてとらえなかったけれども、宮田幸一 1948「日本語文法の輪郭」は、「Naki *mo* sinai si, warai *mo* sinai」のようなものを、“英語で一つの動詞を分解して do+原形 という形にする”の対比して、これをひとつの単位とみとめた。^{注2)} 宮田は“助詞”を単語とみとめ、“だいたい普通の文法でいう「係助詞」に当る”ものを“取立て助詞”とよんだが、「なきもしない」をひとつの語形相当とみたところは、松下よりもすすんでいる。

教科研 1963「文法教育」は、“とりたて”を形態論上のカテゴリーとし、名詞、動詞、名詞の用言なみの語形、形容詞・形容動詞のそれぞれに“とりたて”の節をもうけて、“とりたて形”という名称をあたえた。

この研究で“とりたて形”というのは、教科研 1963 にしたがったものである。つまり、「とりたて形」とは、とりたて助辞をくっつけることによって、

一定の陳述的な意味ないし機能を付与された語形のことである。なお、いろいろな単語、また、その語形の、「も」によるとりたて形づくりかたは、第I部でのべる。

「も」によるとりたて形については、山田孝雄1908「日本文法論」以来、おおくの研究があるが、なかでも、松下1930「標準日本口語法」と佐久間鼎1940「現代日本語法の研究」は、この語形の性格と用法をあきらかにしたものとしてあつかわれている。また、国立国語研究所1951「現代語の助詞・助動詞——用法と実例——」(永野賢執筆)^{注3)}は、“意義・用法”の、はじめのもうら的な記述であり、また、松村明1971「日本文法大辞典」の「も」の項(阪田雪子執筆)^{注4)}は、現在の国文法での「も」の研究の水準をしめすものとかんがえてよいだろう。これらを中心に、他の研究文献もふくめて、それらを検討しながら、論をすすめたい。

この研究は、文学作品、そのほか実際につかわれた資料(さいごにあげる)の分析を中心にして、「も」によるとりたて形の、かたちづくり、意味、機能を記述するものである。方法論上の問題は、それぞれの事項をとりあつかうなかでのべていくが、意味と機能との関連に重点をおいて、研究をすすめたつもりである。

I かたちづくり

0. “接続”と“かたちづくり”

従来の国文法では、いわゆる“助詞”を単語としてとらえたため、単語のかたちづくりの観点からの記述がおこなわれなかった。そして、“接続”という概念のもとに、どんな“語”につづくか、また、活用語ならば、どんな“活用形”につづくかが記述されただけで、その“活用形”がどんな形態論的な性格をもっているかも検討されなかった。

たとえば、阪田1971の接続のところは、つぎのようにかかれている。

- ①体言および準体助詞につく。例きょうもいい天気だ／インクは青いも黒いもあります ②活用語の連用形につく。例せっかくたずねて来たのに、彼は会いもしなかった／うれしくも悲しくもありません／それほど便利でもないよ

うだ／ほめられもしなかったが、別に叱られもしなかった／そんなことは聞きたくもない（以下略）

①において、「きょう」が体言で、「の」が準体助詞であることをいちおうみとめるとして、たしかに、それらが「も」のまえにあるのだけれども、それでは、「も」でとりたてなければ、どうなるかという、そのことは記述されていない。とりたて形にならないばあいをかんがえてみるのに、「きょうも」は、「も」のない「きょう」になるのだが、「青いのも」のほうは、「も」をとりのぞいた「青いの」ではなくて、それに「が」のついた「青いのが」になるだろう。このように、もとのかたちと対比すると、“接続”を記述しただけでは、十分な記述にならないことになる。つまり、「きょう」を「も」でとりたてるときには、そのまま「も」をつけ、「青いのが」を「も」でとりたてるときには、「が」をとりさって、そのかわりに「も」をつけるのだというふうに記述しなければならないのである。

それでも、①はまだ“文節”の内部でことがおさまっているけれども、②になると、もっとやっかいなことがおこる。「会いもしなかった」というのは、「会わなかった」をとりたてたものである。意味的には、「会いも」があうことをとりたてたのだともいえるけれども、形式的にみれば、もとのかたちが「あいを しなかった」であるというのはむりなので、形態論的な説明としては、やはり、「会いもしなかった」は「あわなかった」をとりたてたかたちだというべきであろう。そうすると、「あわなかった」というひとつの“文節”を「も」でとりたてることによって、「あいも しなかった」という、ふたつの“文節”からなる構成物ができたのである。しかも、もともと“連用形”でなかったものが“連用形”になっている。だから、ここのところをきちんと記述するとすれば、「あわなかった」は、「あい」という“連用形”にして、それに「も」をつけ、それを「しなかった」とくみあわせて、「あいも しなかった」にするのだというふうにしなければならないのである。

それでは、もともと“連用形”であるものに「も」を接続させることができるのであろうか。ここで、おなじく松村1971「日本文法大辞典」の「連用形」の項（坂梨隆三執筆）から動詞の連用形の例をあげてみる。（つぎのでぜんぶ）

花咲き、鳥歌う／雨に濡れ、風邪をひいた／百メートル下に転落し、けがもし
なかった／急ぎ帰る／話し続ける／呼び出す／遊びに行く／飛んで／立って

これらのあとに「も」を接続させると「咲きも／濡れも／転落しも／急ぎも
／話しも続ける／呼びも出す／遊びもに行く／飛んでもで／立っても」となっ
て、どれひとつとして可能なものはない。この事実にもとづいて記述するとす
れば、「も」は動詞の連用形には接続しないということになる。そうすると、
“活用語の連用形につく”ということは、いったいどういうことなのか。この
ことが、あらためて問いなおされなければならなくなるだろう。

じつは、坂梨1971は、“①助詞・助動詞をつけずに用いられる”“②助詞・助
動詞に続いて用いられる”のふたつにわかれており、①の②に“連用形は体言
と同じ資格にもなる”として、うへの「遊びに行く」をあげているので、「あ
いもしなかった」は、おそらくここにはいるのだろう。もし、そうならば、「も」
の“接続”のほうも、そのむねがしるされなければならない。しかし、一方、
“形容詞”・“形容動詞”のほうは、「早く走る」も「静かに流れる」も(ともに坂
梨の例)，そのまま「も」がつきそうである。だとすると、これらをひっくり
めて“活用語の連用形につく”とのべていることは、“接続”という概念が
かなりおおざっぱなものだということをものがたっているといえるだろう。

宮田1948は、動詞のとりたてについて、つぎのように記述している。^{注5)}

一つの動詞を分解して、原形+suru という形となし、その原形のつぎに取立
て助詞を入れるのである。たとえば、aruku という動詞なら、これを分解して
aruki+suru という形となし、その aruki のつぎに取立て助詞を入れて、
aruki wa suru, aruki mo suru などというのである。

宮田の論には、助詞をきりはなすという不徹底なところもあるが、それで
も、分析的な語形^{注6)}を一語形相当のものとしてとらえているので、このよ
うな記述ができるのである。

これに似たあつかいは Alfonso 1971「Japanese Language Pattern」にも
あり、「hanashi MO kiki MO shimasen」や「yasashiku MO muzukashiku
MO arimasen」や「ichigatsu DE MO nigatsu DE MO arimasen」などを、
それぞれパターンとしてあつかっている。^{注7)}

従来の国文法の“接続”というとらえかたは、語形の観念のないところに、

形態論上の基本的な欠陥をもつ。つまり、“かくかくしかじかの単語は、あるいは、かくかくしかじかの単語のかくかくしかじかの語形は、かくかくしかじかのかたちに「も」を接続させて、とりたて形をつくる”としなければならない記述の、重要なまえ半分（~~~~~のところ）がすっぽりぬけているところに第一の欠陥があり、できあがったとりたて形が、分析形をふくめて、どのような語形であるか（~~~~~のところ）についての記述がないところに第二の欠陥がある。じゅうぶんな記述は、たとえば、“名詞のガ格（ヤマガ）は、ガをとりさった語幹部（ヤマ）に「も」をつけて、（ヤマモという）とりたて形にする”“名詞の述語形（ヤマダ）はコピュラ接辞（ダ）をなかどめ形（デ）にして、それに「も」をつけ（ヤマデモ）、それをコピュラ「ある」とくみあわせて、（ヤマデモアルという）とりたて形にする”としなければならないのである。

“かたちづくり”というのは、ここでは、いろんな語形を、「も」によるとりたて形にするのに、どのようなてつづきをとるかということである。“接続”というとならえかたをしなかったのは、以上のような理由による。

なお、ここで形態論上のかんがえかたや用語のつかいかたは、主として、鈴木重幸1972「日本語文法・形態論」^{註8)}、高橋太郎1975「幼児語の形態論的分析——動詞・形容詞・述語名詞——」によることにする。

「も」によるとりたて形のかたちづくりは、おおまかに、つぎのようにいうことができる。

- i) 「も」によるとりたて形は、名詞、動詞、形容詞、副詞、後置詞、コピュラなど、いろんな品詞に属する単語によって、そのかたちがとられる。
- ii) 名詞については、原則として、とりたて助辞「も」が格形式のあとにつくというてつづきによって、つくられる。

しかし、こまかにみていくと、「も」によるとりたて形をとらない単語もあるし、また、おなじ単語であっても、また、おなじ語形であっても、構文的な機能によって、このかたちをとりえないものもある。また、このかたちから発展して、派生形または派生語になったものもある。そのようなことについて、

以下、品詞ごとにのべていく。

1. 名 詞

1) 連用的な格形式のあとに「も」がつく。ただし、ガ格のばあいには、「が」をとりさって「も」をつける。

山も、山をも、山にも、山でも、山とも、山へも、山からも、山までも
ヲ格は、ハダカ格・ガ格のばあいとホモニムな「山も」になることがおおいが、「山をも」になることもある。

(1) 家族構成の変化は、家族のもつ機能をも大きく変えた。(学問267)

「山でも」は、デ格のとりたてのことであって、「でも」によるとりたてのことではない。

(2) 卵は自分の家でも食った。(生活205)……………[家で+も]

(3) ね、よかったらお蕎麦でも食べて行かない。(放浪247)…[おそば+でも]

「山よりも」は「山より」の異形態であろう。

(4) 隠岐達三はやゝ甲高く、年令よりも若い声をしてゐた。(帰郷317)

2) 連体格は、「も」によってとりたてることができない。

3) 準体助辞「の」のついたものは、ふつうの名詞のばあいとおなじである。

山のも、山のもの、山のともし、など

(5) そのハレーションに薄肉色のもあるし、黄蔷薇色のもある。(河明308)

(6) あゝ瀬川君のも苦しい境遇だが、貴方^{あなた}のも苦しい境遇だ。(破戒324)

4) 述語形のばあいには、「だ」を「で」にして、コピュラ「ある」とくみあわせる。

(7) かれらは、みんななかなかの文筆家でもあった。(高崎38)

5) ひっくりかえしや省略の文の文末において「山もだ」「山もか」「山もさ」「山もよ」のような形式をとることができる。(「は」によるとりたての形は、このようなてつづきがとれない。)

(8) ブルータス、おまえもか。

6) ある種のとりたて形式は、さらに、「も」でとりたてることができる。

山だけでも、山ばかりも、山ほども、山ぐらゐも、山なども、山なんぞも、山なんかも、山すらも、山さえも、山までも、など

(9) 幹部連の内輪揉めなんぞも、原因はそこいらのむづかしい産業政策にあるらしいやうですね。(真知145)

(10) そのくらの事情さへも行介には分ってゐなかつた。(波353)

つぎのようなとりたて形式は、「も」でとりたてることができない。

×山はも、×山こそも、×山でもも、×山なんても、×山しかも

格形式のあとにある種のとりたて助辞をつけ、さらに「も」をつけることがある。

山にばかりも、山へさえも、山にまでも

(11) 未解決なものを持っているので、子供への愛情にまでも素直に入ってゆけないのではないかしら、と(くれ22)

7) ある種のならば形式のあとに「も」をつけることができる。

山だの川だのも、山とか川とかも、山なり川なりも、山と川とも、山や川やも
つぎのようなならば形式にはつかない。

×山に川にも、×山か川かも(「か」が終助辞であるばあいにはつく)

8) ある種の不定代名詞や数量名詞の基本形の「も」によるとりたて形を語幹にしたものは、ガ格、ニ格、ノ格などになって、曲用へのきざしをみせている。このうちの、不定称の代名詞に「も」のついたものは、いろんな点からみて、べつの全称代名詞に派生しているとおもわれ(II-7, 付)、また、そのなかでも「いつも」は、完全に派生をとげているといえよう。

だれもが、どれもが、なにかもが、どれもこれもが、どのひともが、何頭もが

なにかもに、どれもに、何人もに

いくつもの、何人もの、百人もの、百年も千年もの

いつもと、いつもより、いつもの、いつもは、いつもも

(12) それほど私には、その何もかもが親しくなつてゐる。(風立162)

(13) 一昼夜のうちに延べ九千リットルもの血液を、受けて押し出すという、

(人工364)

つぎの例は、すこしいりくんだ文だが、実際に使用されたものである。

(14) 彼は、カンペ版は[質屋で]流れた筈だったから、レクラムの四冊本選集で何もかもにして——研究室にエルスター版のあることを誰か教えてくれたが見に行く元気もなかつた。(むら330)[レクラム版だけよんで、なにかかもよんだことにしておく。]

今回の資料には見あたらなかったが、つぎの2例のような、二格もあるとおもう。

(15) いくつかの例文をつくったが、そのどれにも不満を感じた。(資料外)

(16) きつねにばかされた経験をもつひとはおおい。わたしは、何人にも、そういうはなしをきいている。(資料外)

9) 動詞・形容詞の文法的派生名詞^{注9)}

動詞や形容詞の連体形に準体助辞の「の」がついて、名詞と同様に曲用するものも、名詞と同様に「も」のとりたて形をもつ。

よむのも、あかいのも、きれいなのも、よむのにも、よむのとも

また、準体助辞をとまわず、連体形とホモニムなかたちで、この用法となるものが、化石的にのこっている。

みるもあわれな、よむもよしよまぬもよし

きれい(な)もきたないもあるものか

10) 句や節をひとまとまりにして、ひとつの名詞のように文中ではたらかせることがある。これらが「も」によってとりたてられることがある。

山か川かもわからない、だれがいくかもきめてない。

(17) いえ私はもう死んでしましたも同じなんで御座います。(破戒324)

(18) 外聞悪いも何んにも知んねえんだな(土182)

2. 動 詞

1) 動詞は、第一なかどめ形にして「も」をつけ、「する」とくみあわせる。つまり分析的な形式となる。

このばあい、「する」は、補助動詞のようになり、この「する」が、機能、ムード、テンスなどによって、かたちをかえる。つまり、この分析形は、それ自身が文法的な派生動詞^{注10)}となる。この点で、この形式は、“とりたて形”というよりも“とりたて動詞”というほうがよいかもしれない。

よみもする、よみもした、よみもしよう、よみもし、よみもして、よみもすれば、など

(19) 排他的な行為や言葉はどんなさやかなものでも、それが共同生活のなかでのものであるだけに、非常にどぎつい印象を与へもするし、特別な注意をそそりもする。(生活165)

(20) それに、佐々なんて、大きい目から見たら、やっぱり何処の誰だか判りもしな

い名の一つよ。(伸子194)

(21) 以前とは比べものにならないほど落ちつきもし、もの馴れてもあた。

(多情304)

(22) 塙屋の妻は(中略)娘の出生をあまり悦びもせず、(河明331)

(23) このくつしたは、あしのサイズにしたがって、ちぢみもすれば、のびもします。(資料外)

2) 派生動詞やあわせ動詞も、おなじてつづきをとる。

(24) だんだん投書も少なくなるし、内地の現代向きの人に代へると始終編輯主任に攻撃されもしますが、なに、これだけは死ぬまで人にはやらせない積りでず。(河明298)

(25) 然し彼は、立ちあがらうともせず、笑ひかけもせず、なほさら言葉もかけずに、そのまま静かに居竦んであた。(多情367)

3) 可能動詞「よめる」「ねられる」などは、2)によって、「よめもする」「ねられもする」とするが、そのほか、可能動詞にするまえにとりたてにしてから、その「する」を「できる」にするてつづきもある。

(26) 折角呉れたものを棄てられもせず(思出230)

(27) 二人の巡査も、街のわいわい連中も彼を捕へもできず、大きい波を打って右往左往した。(故旧172)

なお、「することもできる」は、「することができる」のとりたてである。

4) ふるくは、あわせ動詞のまえ要素のあとに「も」をつけることができたようであるが、現代語では、それが化石的にのこっているだけである。

おもいもかけぬ、かながえもおよばぬ、おもいもうけぬ、おもいもよらず、とりもなおさず

(28) また思いも設けぬ偶然の出来事で、途方もない、ほとんど信じられぬような死に方をするものもある。(出家214)

5) 語根部の独立しやすいサ変動詞は、おおくのばあい、語根のうしろに「も」をつける。

(29) その途中彼は或は林中尉殿はどこか道でおとしたものとお考えるかも知れないなどと夢想もした。(真空181)

(30) 同じ二十一日、ニューヨークや西ドイツの観測所では、慧星が近日点通過後も、分裂も消滅もしなかった模様であると発表し、関係者を驚かせた。(未知327)

なお、今回の資料にはなかったが「存在もしない」のような、1)のてつづ

きによるものもあるだろう。

6) 第二なかどめと補助動詞をくみあわせた分析形のばあい、第二なかどめ形のあとに「も」をつけるものと、補助動詞をとりたてにするものがある。そのどちらにするかについては、それぞれの形式ごとにかたよりがあるようで、資料のかずもアンバランスであるが、両方のとりたて形になる可能性があるだろう。

(31) イギリス文学科を出る緒方が今日の集まりに来ようなどは安吉は考えてもいなかった。(むら327)

(32) 一度は人から馬鹿にされてもみなければと思ひ直したりして(機械24)

(33) 石臼のやうな木の根をかなり離れた所まで持ち上げて運んでも行くし
(生活223)

(34) 私をそだててくれもしない母親なんてありようがないのだし(放浪295)

(35) いつまでもまごまごしてゐられもしなかった。(多情314)

7) 「～しようとする」「～したりする」は、「～しようともする」「～したりもする」にすることができる。

(36) 柳吉は三味線の撥で撲られた跡を押へようともせず、ごろごろしてゐた。
(夫婦25)

(37) いま川の流れてゐるところに、そっくり塩が寄せたり引いたりもしてゐたのだ。(銀河275)

8) 以上にのべたものは、いずれも“とりたて動詞”のような性格をもつものであるが、せまい意味での語形のとりたてとしては、「して」「してから」「しながら」「しつつ」のような分詞形を「も」でとりたてたかたちがある。

(38) 少しは私の身になっても考へて見るがいい。(伸子150)

(39) 寝床に入つても丑松は長いこと眠られなかった。(破戒139)

(40) 歩きながらも、彼は、決して、駒子の先きを歩かないように、注意していた。(自由71)

(41) 理想は現実と無限の距離を保ちつつもなほ理想としての権利を失はずに行くことが出来るが(人格39)

このうち、第二なかどめ「して」のばあいは、(38)もそうだが、「にてもくったし、やいてもくった」のように、修飾語になる用法にかぎられる。「しても」が述語的な用法でつかわれると、ゆずり形^{注11)}になってしまうからである。

(42) 人間は幾つになっても中学生のころは遺ってゐます。(河明298)

第二なかどめの「も」によるとりたて形は、ひじょうにすくなく、今回の資料にも、ほとんどあらわれなかった。しかし、これがないわけではなく、また、つぎのように慣用句化して、副詞や接続詞に相当するものとなっているものもある。

(43) 直方の町は明けても暮れても^す煤けて暗い空であった。(放浪6)

(44) 寝ても覚めても、結局は死んでしまいたい事に話が落ちるけれど(放浪31)

(45) それにつけても、想い出すのはママの事ばかり。(石森史郎1972「旅の重さ」26場)

動詞の第二なかどめが後置詞化すると、自由に「も」でとりたてられる。その例は、「5. 後置詞」のところにある。

3. 形容詞注¹²⁾

1) 形容詞も、動詞と同様、「も」によって、“とりたて形容詞”をつくる。肯定のばあいには、なかどめに「も」をつけて、コピュラ「ある」とくみあわせる。否定のばあいにも、なかどめに「も」をつける。

たかくもある、うつくしくもある、しずかでもある

たかくもない、うつくしくもない、しずかでもない

(46) あの我儘な、そのくせ、いやに気をつかう女が、叔父の家へ、一カ月も泊ってるといふのは、不思議でもあり、おかしくもあった。(自由336)

(47) 急に春めいてきていて、裸足の足が冷たくもない。(むら352)

(48) 広くもない畑へ残らずが一度に鍬を入れるので(土176)

2) 「あかかったりする」「しずかだったりする」は、動詞と同様、「～たり」のあとに「も」をつけて、とりたてることができる。

(49) 谷の水は、時に異様にくろかったりもした。(資料外)

3) 第一なかどめに「も」をつけて、とりたて形にする。

(50) 僕は一女子に先を越されたと思へば腹立たしくも、また鈴江君の勇気を心地よくも思った。(思出214)

(51) それでも不自然にも思はれなければ怖ろしくもなかった。(真知180)

(52) この意地こそは誠に凄じくも壮大なものと言はねばならぬ。(李陵195)

(53) 難攻不落と見えた「自信の城」の哀れにも惨な降服がかうまで速かに来ようとは！(多情356)

なお、第二なかどめに「も」をつけると、「たかくても」「しずかでも」のよ

うにゆずり形になってしまう。また、「せまいながらも、たのしいわが家」の「～ながらも」という形は、形容詞のばあいは、ゆずり形とかんがえたほうがよいだろう。

4) 文法的な派生形容詞も、形容詞同様、「も」でとりたてることができる。

よみたくもある、よみたくもない；よみにくくもある、よみやすくもない；よみそうでもある、よみそうでもない、よまなそうでもある；よみそうもない、よみそうにもない

(54) 帰りたくもあり、帰りたくもなし，そういうあいまいな気持ちでいた彼は…
…(暗夜211)

(55) よほど手を入れなければ住めそうもない^{いさ}家で (暗夜241)

(56) それは、なみなみならぬ決心がなければ出来さうにもないことだったし、…
(多情341)

うちけし動詞の否定のばあいもある。

(57) 一種のアセリのようなものが見られなくもない。(抵抗300)

第一なかどめの「も」によるとりたて形もある。

(58) そんなにくいたくもおもわなかった。(資料外)

(59) 物質の置かれるべき世界はこれ以外にはありそうにも思えなかったのである。(物質258)

4. 副 詞注¹³⁾

1) 副詞のなかには、「も」をつけてとりたて形にすることのできるものがある。

～的にも、みずからも、さっきも、こうも、これまでにも、一般にも、あえなくも、がんこにも、ぐうぜんにも、ふしぎにも、ふこうにも、むざんにも、ふそんにも、はやくも、なおも、またも、ああも、こんなにも、かくも、あまりにも、いくえにも、かえすがえすも、いかようにも、しいても、むりにも、まがりなりにも、ともかくも、かりにも、ちっとも、すこしも、いささかも、しばらくも、にこりと、びくりとも、わけなくも、ふかくも、はっきりも、そうも、など

2) 慣用句のなかでだけとりたて形になるものもある。

ややもすれば、にっちもさっちもいかない、いかんともしがたい、えもいわれぬ、など

3) 「も」によるとりたて形が副詞に派生したものもある。

からくも、ごうも、さても、こころならずも、さも、しかも、せひとも、どう

にも、どうも、なにぶんにも、なにも、ゆめにも、よにも、いやしくも、など

4) 引用文「と」のとりたては、副詞のとりたてと似ている。

(60) その声に混って「おーい」とも「ほーい」とも聞える呼声が伝はって来た。
(野火148)

(61) それなら、あんな生活を再び繰り返さないようにすればいいとも思う。
(暗夜210)

5. 後置詞

1) 連用的な後置詞は、ふつう、うしろに「も」をつけて、とりたて形にすることができる。

(ヲ格支配) のぞいても、おいても (措いても)、など

(ニ格支配) おいても、対しても、際しても、よっても、とつても、ついても、
も、関しても、しても、など

(ト格支配) いっしょにも、くらべても、など

(ノ格支配) ためにも、ときにも、など

(62) 戦時においても平時においても彼は永久に軍務大臣たるべき人である。
(貧乏161)

(63) 田口の叔母さまに対してもさう思ってるわ。(真知184)

(64) 辺見君にしても、堀君にしても、粒選りの好漢が死んでしまって……
(自由32)

(65) それで瀬川君の為にも突^ないて下さるといふものでせう。(破戒324)

2) 後置詞に支配される格形式は、一般に、格助辞のあとにとりたて助辞をつけるてつづきによるとりたて形をとらない。

○山だけについて ×山にだけについて ○山についでだけ

○山だけに対して ×山にだけ対して ○山に対してだけ

○山だけに関して ×山にだけ関して ○山に関してだけ

×山にもついで ○山についても

×山にも対して ○山に対しても

×山にも関して ○山に関しても

しかし、つぎのようなものは、「も」によってとりたてることができる。あるいは、これらは、まだ後置詞化しきっていないのかもしれない。

(66) どうかすると叡知にも似た克明な批判力を持ってゐた。(太陽119)

(67) 高崎山にはじまる全国的なサル寄せブームをもふくめてここに書き記した一連の事件は、やはり、戦後の日本におけるもっとも目ざましいできごとの一つ

といっではいけないだろうか。(高崎53)

6. コピュラ^{注14)}

1) コピュラで、「も」によってとりたてられるものがある。

山でありもする, 山でなくもない。

山のようにもある(ない), 読むようにもある(ない)

山らしくもあり, 山らしくもない

(68) その都会は、東京でありもするし、また、大阪でありもする。(資料外)

(69) 駒平もそれをうかがっているらしくもあった。(生活239)

2) コピュラで、「も」によってとりたてられないものもある。

×山だそうでもある ×山にちがいはなくもある(ない)

×山かもしれなくもある(ない) ×山かもしれもしない

動詞または、コピュラに引用の助辞「と」をつけたものとくみあわさる推量のコピュラ「みえる」は、その「と」のあとに「も」をつけられるが、それ自身はとりたてられない。

(70)このようすと、雨がふるともみえない。(資料外)

×このようすと、雨がふるとみえもしない。

II 用 法

0. “意味”, “機能” と “用法”

松村1971「日本文法大辞典」は、凡例で、“助詞”を記述するのに、“原則として、どの語においても、語誌(語源を含む)・接続・意味・変遷・補説の各項目について記述するようにした。”とのべている。「も」の項(阪田1971)も、これにしたがって、**意味**の項目を、つぎのようにのべていく。

①事情の類似したものが他にあることを表わす。例毎日よく降るね、きょうもまた雨降りだ/[中略] ②同じ条件下にある二つ以上のものをあわせ提示する。例金もひまもない/(以下略)

しかし、この①と②のちがいは意味のちがいではない。「金も」が「ひま」という同類のものが他にあることをあらわし、「ひまも」のがわからずも同趣旨のことがいえるとすれば、②も①とおなじ意味をもつことになる。ここでの①と②のちがいは、阪田がのべているように、②が①とちがって、“二つ以上の

ものをあわせ提示する”ところにある。つまり、それは、構文上の性格のちがいのなのである。形態論的なかたちのもつ“構造的なむすびつきのなかにおける構文的な要素のふるまいをしめす”はたらきを“文法的な機能”というが、^{註15)}いまうえにひいた阪田の①と②のちがいは、機能上のちがいである。

「も」によるとりたて形の構文的な機能は、このとりたて形にとって、きわめて重要な事項である。佐治圭三 1975「現代語の助詞「も」」などは、もっぱらその面から「も」を追究している。ただし、佐治は、「も」のいろいろな意味・用法を全体としてひとつのものとみて、「も」の性格をみようとしており、意味とのかんれんにおいてみていない点で、せっきくの機能分析がいきいていない。

「も」によるとりたて形は、いろいろな用法をもっていて、そのそれぞれにおいて、さまざまなかたちで意味と機能がからまっているのである。たとえば、他と同類であることをしめす意味は、いろいろな語形の「も」によるとりたて形がいろいろな機能をはたすばあいを実現され、そのうちの主題提示機能をはたすものが含蓄的な意味をあらわす用法にずれていくとか、また、提示された最低のものが全体を代表するという意味をあらわすもののうち、一定の量的な性格をもつものがもっぱら陳述的な機能をはたすものになっていくとかいうふうに、たいいていばあい、意味と機能がむすびついたかたちで文法的な性格をおびているのである。

この研究では、「も」によるとりたて形のもつ文法的な意味と、その実現する構文機能とのかんれんに重点をおいて記述した。ただ、現在のところ、まだ意味と機能の関係についての一般的な原理がたてられておらず、この関係のシステムを章なり節なりのくみかたのうえに反映することができなかったので、いちおうの処置として、この意味と機能のからまったものを“用法”とよんで、この第Ⅱ部をたてることにした。

なお、永野1951は、その序説で“現代日本語における意義・用法を細かく分類し”とのべている。

1. 他と同類であることの提示

これは、「も」でとりたてられた単語、または、その単語をふくむ句・節・

文が他のものごとと同類であることをしめす用法である。それは、松下が「合説」とよび、佐久間が「共説」となづけ、また、山田に「包括的含蓄的」といわせた、その包括性をあらわす用法で、現代語における「も」によるとりたての基本的な用法である。これが基本的であることは、いろいろな種類の単語のいろいろな語形をとりたて、また、いろいろな文の成分のなかにあらわれうることによって保証されている。つまり、この用法がもっとも自由な用法なのである。^{注16)}

1-1. この用法と機能

この用法の機能上の特徴は、まず、いろいろな成分のなかにあらわれることである。^{注17)}

a) 主語のばあい

- (71) 細君が笑うと、一同も、腹を抱えた。(自由380)
- (72) 中学校へはひってからの成績も大変よかった。(波354)
- (73) 今は二人も火事場へ駆けつける人の群にすぎなかった。(雪国168)
- (74) 母を誘はうとしないのもそのために違ひなかった。(真知191)

b) 述語のばあい

- (75) 佐助は実に此のやうな世話を一人で引き請け合間には又稽古をして貰ひ時にはお師匠様に代って後進の弟子達に教へもした。(春琴173)
- (76) 岡部は得意でもあり、満足でもあるらしかった。(闘牛94)

c) 対象語のばあい^{注18)}

- (77) 木谷はこのときのこともまた忘れることはできないのである。(真空194)
- (78) 私の死は、大衆をも裏切ることになるであろう。(くれ102)
- (79) 今までずいぶん人にも迷惑をかけ、人からも迷惑をこうむっている。
(私の12)
- (80) 「ごちそう」はこっちへもしてもらひたいね。(子を180)
- (81) しかし、これらの準星の多くは、アマチュアの望遠鏡でも見えるほど明るい。
(宇宙96)
- (82) お言葉はあれの母とも御相談になった上のものでしょうか。(帰郷324)

d) 修飾語のばあい

- (83) しかし彼は一方では案外気安く楽観的にも考へたのであった。(生活253)

(84) 自分でも気がつくぐらゐ、私の唇も慄へてゐた。(河明322)

(85) 少しは私の身になっても、考へて見るがいい。(伸子150)

e) 状況語のばあい

(86) 審議なかばにして、この日も解散になった。(人間345)

(87) 座敷でも、このごろは、誰よりも忙しさうです。(末枯72)

(88) 空からも花が降ってきた。(野火138)

(89) それで彼は遠く利根川の工事へも行ったのであった。(土98)

(90) ……各地の地元においても、サル・ブームがおこりつつあった。(高崎39)

以上のように、この用法が連用的な成分のぜんぶにわたっていることは、他の用法とくらべて基本度のたかいことの証拠となる。

なお、つぎの二例はよびかけ、あるいは、例示の独立語といえるだろうか。

(91) 「まあ、お父さまも鉄平さまも。……私が致しますわ。」

(山田信夫1974「華麗なる一族」37場)

(92) 彼は、そんな風に、答えた。それから、酒を飲んでいたことも、暗中の怪漢から、生命を脅やかされる感じがしたということも。(自由359)

この用法における「も」によるとりたて形の機能として、つぎにとりあげなければならないのは、「も」によるとりたて形になることによって、はじめて可能になる構文機能である。

いままで「も」でとりたてられた単語がいろんな成分のなかではたらくことをのべたが、ここまでは、その機能を発揮するために「も」によってとりたてられることが必要かどうかについては問題にしなかった。しかし、「も」によるとりたて形は、それになることによってはじめてその構文をなしうるという、いくつかの積極的なパターンづくりの機能をもっている。そのことについてのべるのである。

a) 並立成分のある構文をつくる機能

これは、ふたつ以上の等価なまとまりをひとつの文のなかに共存させる機能である。この機能は、「と」「や」「か」などの並立助辞の膠着した語形のそれと似ているが、後者がいくつかの単語をひとまとめにして、ひとつの成分のようにするのに対して、これは、いくつかの成分を等価なものとしてならべる点でことなっている。

ふたつ以上の単語のおなじ語形をならべて同格の成分をつくりだすのが典型的である。

- (93) 愛も涙も決心も、すべて斯の一息のうちに含まれて居た。(破戒325)
- (94) 藩主の眼にも藩士たちの眼にも涙が光っていた。(落城14)
- (95) 保名のところへも鶴来のところへも安吉は別の道を取って行った。
(むら304)
- (96) 彼はなんという事なしに気持の上からも、肉体の上からも弱って来た。
(暗夜251)
- (97) これは生物学的にも歴史学的にも何の根拠もないことである。(革命141)
- (98) 自分は以前も今も精神的には少くとも健全であるとして(故旧162)
- (99) 成程、頭が寒かったが、振向「き」も答へもしず^いに一生懸命走った。
(多情165)

句や節をならべることもある。

- (100) 銀之助はまた、お志保のことを未亡人にも話し、弁護士にも話した。
(破戒329)
- (101) 解放も漂泊であり、脱出も漂泊である。(人生133)

並立構文をつくる機能は、他と同類であることの提示という意味と密接にむすびついていて、その意味がよわまるとこの機能もよわまる。(後述)

b) 題目を提示する機能

この機能は、「は」によるとりたて形と共通するものである。松下1924が“提示格”を“題目格”“係格”“単純提示格”のみにつわけて、「は」と「も」を“題目格”としたのも、この提題性にかからんでいる。

このなかには、「～ハ ～ガ ～」という形式^{注19)}を基礎とする構文のばあいと、題目語^{注20)}のある構文のばあいがある。1例ずつあげておく。

- (102) しかし、家の者も異論はないでせう。(帰郷325)
- (103) 今日の平井行きも、何か秘密の相談で行ったんだろう。(むら329)

この提題機能は、その提題性が同類性とからまることによって、一定の同類-含蓄的な意味を生じ、さらに、その提題性が優位になることによって、含蓄的な表現へのコースをたどるものである。

c) ある部分を強調する傾向

ここにのべることは、とりたて形式一般に共通する傾向であって、積極的に

機能といえるかどうかかわからないが、構文のうえに一定の影響をあたえるので、ここでとりあげておく。

とりたて形は、“そこに表現されているものごとが、現実にある同類のものごとに対してどのような関係にあるかを話し手のたちばかりからあらわしわけ”^{註21)}ものである。つまり、とりたて形式の本来のはたらきは、その文内の一定の部分をその文に表現されていないものと関係づけることである。しかし、その結果、その部分が文内の他の部分よりもつよく表現されることになり、その部分が他の部分との関係をあらわすものとして本来もっている格的な形式をかえることがある。

(104) それに何だか大そう秘密なんださうで、私にだけ耳に入れるってことだが
(真知161)

(105) 君、雨なんぞ降られて溼ったもんぢゃあない(闘牛134)

これらは、もし、とりたて形式がつかわれなければ、それぞれ、「私の」「雨に」のはずである。

「も」によるとりたて形式にもこの傾向がみられる。つぎの二例は、もし、とりたて形でなければ、「親父さんに対して」「言葉づかいにおいて」のように後置詞がそえられるであろう。

(106) それに親父さんにも三敵も増段したんだから(生活270)

(107) 挨拶する言葉づかいにも明子は変にちくはぐになるのだった。(くれ7)

1-2. この用法の下位区分

松下や佐久間が「合説」または「共説」として一括したこの用法は、その後永野1951によって、つぎのように、おおきく二分された。

① 同類として共存するもの提示

② 事情の類似した他の事物の存在を暗示し、類推させる形である事物を提示する

①は、同類のものが文中に表現されているばあいであり、②は表現されていないばあいである。「甲も乙も」のように同類のものがともにこの形式で表現されているものが①であることはいうまでもないが、永野は意味をおもじたので、「だれも」のようなものも①のなかにいれている。

○民主主義ということならばだれもが知っている。

しかし、この例文は、わたしのいう“他と同類であることの提示”のなかにはいらないので、ここであえて問題にする必要はないだろう。

このような区別は、Alfonso 1971 にももちこまれた。Alfonso は“...AND ALSO...”の章で“MO”の用法をいつつにわけている。

1. MO with Noun in General

Igirisu EMO Fransu EMO ikimashita など

2. MO in Sequence of Attributes

atsu-KUMO samu-KUMO arimasen など

3. MO as a Sequence Signal

uta MO joozu ni utaimasu など

4. “He doesn't read or write”

hanashi MO kiki MO shimasen など

5. Concessions and Prohibitions

tabe TE (MO) ii? など

このうち、5は他の語形であり、1, 2, 4はかたちづくりのちがいであるから、いまの問題の観点では、ふたつのとりたて語形の共存する1, 2, 4と、ひとつしか存在しない3とが分けられている点を指摘すればよい。

阪田1971は、つぎの三種類をわけている。

① 事情の類似したものが他にもあることを表わす。

○毎日よく降るね、きょうもまた雨降りだ／など

② 同じ条件下にある二つ以上のものをあわせ提示する。

○金もひまもない／など

③ 事情の類似した事柄をあわせ述べる場合のそれぞれの主題を表わす。

○この家は庭も狭いし、日当たりも悪い／など

つまり、阪田の①は永野の③に、阪田の②③は永野の①にはいるわけだが、実は、永野も①を(イ)(口)(ハ)に下位区分していて、阪田の②③は、それぞれ永野の(イ)(口)にあたる。(口)のあとのほうは、阪田の①かもしれないが、例がないので不明。

(イ) 事情の類似しているいくつかの事物を、互いに同類のものとしてあわせ提示する。([～も～も、]の形)

○その頃は、その女も『あね』芸者も、下諏訪に、ゐた。など

(口) 事情の類似したいいくつかの判断を共存させて表現する場合に、それぞれの主題を互いに同類のものとして提示する。〔～も～、～も～〕の形

○雨も降るし、風も吹く。など

なお、(口)のあとに、つぎのようなことがかきそえられている。

〔～が(は)～、～も～〕(接続詞・接続助詞で結ぶ場合もある。まず、ある事がらを提出し、次に同様の事情のものとして、第二の事がらを提出する言い方)

○肥料要素については窒素が最も関係が深く、加里・磷酸も多少関係する。
など

以上のべた、同類のものが文中のどこかにあらわれるか、または、あらわれないかという問題は、それらのものが意味的に同類であるということでもわりきってしまうかぎり、問題にならないけれども、やはり、それらが構文的にちがった形式であらわれるということは、文法上の事実として記述されなければならない。その点で、これらの文献がそれをとりあつかったことはただしいといえるだろう。さらに、それぞれの構文形式は、実は、同類性のていどとも関連しているのであって、そのことを考慮にいれるならば、このあたりの記述は、さらにその意義をふかめるといってよい。

他と同類であることの提示の用法は、つぎのようないくつかの段階にかけて記述することができる。

- a) 「も」でとりたてられた二つ以上の単語が、それぞれ成分としてならべられているばあい
- b) 「も」でとりたてられた単語をふくむ二つ以上の句または節がならべられているばあい
- c) 「も」でとりたてられた単語をふくまない句または節と、それをふくむ句または節がならべられているばあい
- d) 「も」でとりたてられた単語、または、それをふくむ句や節のあらわすものごとと同類のものごとが文中には表現されていないばあい

これら a)～d) は、意味のうえできれいにわけるとはできないが、a) から d) にいくにしたがって、同類性のていどがよまるといえる。

a) のばあいは、さきにあげた (93)～(99) からわかるように、二項の意味的同類性が、その文が直接にあらわす意味のなかにこめられている。(93)にお

いて、「愛」と「涙」と「決心」の同類性は、「このひといきのうちにふくまれていた」ということであって、そのことは、この文に直接にかかっている。ところが、b)～d)のばあいには、なぜ同類なのかが文中にかかれないことがおおい。(100)(101)はb)であるが、b)において、このようにおなじ単語がそれぞれの項にでてくることはすくなく、おおくのばあいは、述語のほうもことなっている。

b)においては、ふつう「甲モ～」と「乙モ～」とがなぜ同類であるかは、文中であらわされない。永野のあげた「雨も降るし、風も吹く。」という例文は、教科書の例文として「雨もふるし、風もふかない。」より適切である。しかし、その適切さは、前者のほうがよく手に同類性を認識されやすいことであって、前者がただしく後者がまちがっているということではない。つまり、前者の同類性、つまり<天気がわるい>ということは、よみてによって連想されることであって、文中には、天気がわるいとはかいてないのである。つぎのような例も、その同類性を認識しやすい。

(108) 放熱性も良好で、使用ゴム量も少なくてすむ。(新し379)

このばあいも、この文自体は、両項が等価であることをしめしているだけであって、等価性の内容は文中にかかれていない。

さきにあげた「雨もふるし、風もふかない」のばあいも、この文の構造は、その両項が同類だということをしめしている。このような文は、たとえば、そのまえに、「きょうも、きのうもおんなじだ」という文をもってくると、その同類性が認識されやすいだろう。「雨もふるし、風もふかない」は、けっしてまちがいののではない。つぎの例もそうだ。

(109) かれは、せもたかいし、はなもひくい。(資料外)

文脈をはずしたばあい、この文は、よみてをとまどわせるだろう。しかし、そのあとに「だから犯人とまちがえられたのだ」といえば、両項の等価性が認識されて、なるほどとおもう。

等価性は、ひろい意味の同類性にふくまれる。しかし、意味のあらわれかたのレベルは、せまい意味での同類性とちがっている。そして、このようなちがいをもたらす原因として、文の構造のちがいがあるのである。

なお、永野の「それぞれの主題を互に同類のものとして提示する」といういいかたは、「雨」と「風」が同類、「せ」と「はな」が同類のようにとられるので、まずい。阪田の“事情の類似した事柄をあわせ述べる場合のそれぞれの主題を表わす”といういいかたのほうがよいだろう。このばあい、形式的には、単語をとりたてているが、意味的には、その単語をふくむ句や節を問題にしているのである。

同類性のはばは、一般に b) から d) へとひろがってくるが、ここでは、b) ~ d) をいっしょにして、どういう種類の同類性があるかをみてみよう。

ア) 特定のものについてとおなじことが実現する。

(110) 青年達について、婦人達も場外へ出てしまった。(太陽283)

(111) ウサギの社会を研究していた河合雅雄君もサルに合流した。京大の動物学教室の間真之助さんのような年輩の研究者も加わった。(高崎38)

イ) 「AもBとおなじ」と表現されているもの。Bのほうからみれば「Aとおなじ」であるので、当然いいかたがちがう。

(112) お母様、真知子さんも私と同じ意見よ。(真知196)

ウ) 相互的なことがらをあらわす。このばあい、ふたつのことがらは、逆の方向において実現している。

(113) 娘はそれをハンカチで拭ひ拭ひ男の顔から目を離さない。——男もいちらしさうに、娘の眼を柔かく見返してあつた。(河明323)

(114) 他国人もまたよく大阪人を知っていた。(総長343)

エ) あることがらの反応としておこなう行動が、結果として、そのことがらといっしょになって両方で共同作業になっている。そういう参加のしかたをあらわす。している行動は、おなじではない。

(115) 何とか考へてみよう。僕も補助はする。(無限147)

(116) 「さうなさいね、太一ちゃん」とおみのもそばからいった。(子を233)

(117) 謙作もできるだけ気楽な調子でそれに答えた。(暗夜223)

オ) 結果がおなじになることをあらわす。

(118) 日本にも輸入の装置がいくらかあり、国産の装置も出現して、ここ数年のうちには、数多く使われるようになるだろう。(文字390)

(119) その内に坊ちゃんも外から帰って入らつた。(桑の148)

カ) 同類の価値をもつことをあらわす。おなじ上位の属性にふくまれる属性といってもよい。(108), (109)もこれ。

(120) 山は葉の落ちる木はみな落ち尽し、常緑の木も陰鬱などす黒さに変って、空の灰色と一種の対照をなしてゐた。(生活229~230)

(121) すでに明治という年号にかわり、江戸も東京とかわっていた。(落城13)

以上はb)~d)に共通するものである。つぎのようなものは、c)に多くみられる。ひとつの構文のパターンとしてとりあげてよいかもしれない。

キ) Aがすすむにつれて、Bもすすむ。そういう相関的な変化が進行することをあらわす。

(122) しかしながら、彼が猛烈に運動すればするほど、世間の反感もますます猛烈になるばかりであった。(貧乏167)

(123) 行列が都心にちかづくにつれて、両側を警備する警官の数も多くなった。(人間341)

(124) やがて白い太陽は、赤い夕日へと変って行く。それと共にわれわれの心も、次第に疲労の色を増して行くのであった。(未知326)

つぎのようなものはd)におおい。

ク) 一般的なもの、あるいは、不特定な多数のものとおなじことが実現することをあらわす。

(125) 財閥解体のあおりを食って、理研も解散を命ぜられた。(物質の101)

(126) 「どうです。あなた方も、記念に一本づつ植ゑて行っては」(河明317)

このク)は、含蓄をあらわす用法につながるものである。意味のかたよりが(ここでは、一般的、不特定というほんやりした意味になることが)、一定の構文的な形式において(ここでは、「も」によるとりたて形が主語ないし題目語として機能するような構文において)実現する傾向があらわれると、そこから、あたらしい用法が(ここでは、含蓄をあらわす用法が)派生してくるものとおもわれる。[なお、「含蓄」以外の派生的な用法の発生の過程も、こういう構文的な条件のなかに、そのめばえがあるといえるだろう。]

2. 含蓄をこめた文の主題提示

山田 1908 は、「も」を“包括的含蓄的な”ものとしてとらえ、これを「は」の“排他的拒斥的な”性質と対比した。^{注22)} また、「は」が“論理的・拒斥的

な”ものであるのに対して、「も」を“感情的・含蓄的”ともした。^{注23)} この“含蓄的”ということの意味を佐久間1940は、つぎのように解説している。^{注24)}

ところが共説の助詞「も」の場合には、あるものが提示されることはされるのですが、それが他に同種のものゝ現に存在することを予想して、それと共存してゐ、その同類として含まれることを暗示してゐます。範囲は限られることなしに、他のもっと大きな領域に連続してゐますから、その叙述は既知のものまたは予想されたものに及んでゐて、それと同様なことを示しますし、判断ははっきりした妥当領域を示さないまゝに、当面の事物がその領域に含まれることを例示的に措定するだけです。さういふ意味で、「も」を含蓄的といふことが出来ませう。

この文章は、“含蓄的”ということの意味をよく説明しているが、“共説”の「も」全体には通用しないだろう。なぜなら、“はっきりした妥当領域を”しめすものがあるからである。つまり、前章“他と同類であることの提示”でのべたものは、あるばあいには、文中において、またのばあいには、文脈的に、どの点において、なにと同類であるかがあきらかだからである。そのような意味で、わたしは、この佐久間の説明を借りながら、その適用範囲を限定して、“含蓄的”という概念をつかいたいとおもう。つまり、妥当領域のはっきりしないものだけを“含蓄的”とよぶことにする。

「も」によるとりたて形には、妥当領域がはっきりしないばかりでなく、さらに、妥当領域が想定されているかどうかもわからないものもある。さいきん電車のなかで、「王もついに756本うったね。」という文を耳にしたが、王貞治はホームランの数における世界新記録をつくったのであって、この文は、だれかと同類であることを意味していない。この「王も」について数人に説明をもとめたら、各人各様の解釈があらわれ、共通点は、けっきょく、「王は」とくらべて、なんらかの含蓄がこめられているということであった。こういうものまでふくめて、“含蓄的”ということにする。

含蓄をこめた文の主題提示を、わたしは、同類であることの提示とべつの用法であるとみとめるのだが、じっさいには、両者のあいだに境界線をひくことはむずかしい。「は」や「も」をそれぞれひとつのものとみて、その「は」と「も」を比較するというたちばの研究である工藤美沙子1964「ハとモ」や宮地

敦子1967「も」などが、「も」のあいまい性をもって「も」の一般的な性質であるようにのべているのは、むりのないことであるとしても、阪田1971のように、「も」の“意味”を10項にわけているものまでが、この含蓄表現を同類提示といっしょにしていることは、この両者をわかつことのむずかしさをものがたるものといえよう。

阪田は、さきにあげた①の「きょうも雨降りだ」などの例のあとに、つぎのようにつづける。

しかし、特にそれと限ったことではなく、他にも事情の似ているもの（こと）があることを漠然と暗示しながら、それを主題として取り上げる場合がある。
園菊も香る季節となりました／彼もなかなかやるね／今度という今度は、私もがまんができない。

このような、同類提示と含蓄表現のわけにくさは、感動助詞から発展してきたといわれる歴史的な性格の反映だろう。しかし、現代語の「も」によるとりたて形には、すでに、あきらかに限定された同類を提示する“論理的な”用法が成立しており、「も」のすべてを“感情的な”含蓄表現としてとらえることはできなくなっている。現代語に視点をさだめた松下1930「標準日本口語法」は、この用法を“特殊の用法”のなかにふくめ、基本的な用法からおいだした。松下は、“不明確な他物との対比”として、つぎの4例をあげている。^{注25)}

- 今度といふ今度は乃公もどうも困ったよ。
- 君もいくぢは無いなあ。
- 彼の男も中々選手だ。
- 日本人も悪い奴が居るよ。

永野1951は、さきにあげた②の(口)として、佐久間から影響をうけたような説明のしかたで一項をたてた。

(口) 当面の事物を、なんらかの妥当な領域に含まれるものとして含蓄的に提示するだけで、何と同様であるかは、はっきりと示さない形。(当然・順当の結果を招く題目の提示、周知の話題の提示、などの場合が多い。)

ここで、わたしは、この用法を“含蓄をこめた文の主題提示”として独立させたいとおもう。それは、この用法が、意味的に、なにと同類であるといいたいこと、および、構文的に、(ア、イはともかく、他は)主語、題目語にな

るものがほとんどだということによる。

松下の例文には「日本人にも……」というのがあるが、これは、不特定であるにしろ、あきらかに外国人と対比されている。永野の例文も、大部分は主語の例である。永野は「客語・対象語」，“副詞的修飾語”などもあげているが、前者は、「理由もわかる」「離乳も安心してできる」「空電が発生することも容易に理解される」のように、ボイス的な観点からみて、“主語”にちかいものであるし、後者は、「売買仕法にもどうやら慣れて、商内もやや円滑化し、」のように、“妥当な領域”が比較的にはっきりしているものである。

さきにものべたように、この含蓄表現は、同類提示とつながっている。1のク)には含蓄表現的なニュアンスがあるし、また、これからのべるアやイは、同類提示ともいえよう。しかし、両極においてそれぞれべつの典型をもつことは、やはり、ふたつのものとして立てておいたほうがよいとおもわせる。含蓄のなかみの積極的な意味規定ができないのに、ひとつの用法とすることは理想ではないのだが、そうかといって、すてておくわけにもいかないので、ほんとうはばらばらになるかもしれない多様な例を、いちおう消極的なまとまりとして、ここにあつめておくことにする。これからあげるいくつかのタイプは、きちんとした分類ではない。しかし、含蓄のなかみをすこしでもはっきりさせるために、いちおう、わけてあげておく。

ア) ある種の代表例：ほかのこともなりたっているはずであるが、ある例をだして、だいたいのおよすをわからせる。

(127) 明かな進歩である農具の機械化も、農民には必ずしも喜ばれて居らぬことを駿介はみた。(生活226)

(128) 老人同士で気持も合って、愉しく送っているの。(厭が290)

(129) ナニ、それも猪子先生のやうに飛抜けて了へば、また人が許しもするんですよ。(破戒307)

イ) ふつう化：いままで特殊であったものが一般なみになることをあらわす。同類提示的な説明をすれば、特殊なものをふつうのものと同類として提示する。あるいは、3の“極端例”にいたしたほうがよいかもしれない。

(130) 辛かったことも、思い出となれば楽しく思われる。(私の24)

(131) 常はめったに寄りつかない看護婦も交る交る顔を出した。(真知207)

(132) 女も甘と成っちゃ役に立つなあ (土217)

ウ) 状態がわり：いままで一定の状態をたもってきたものがその状態をかえることをあらわす。

(133) よりそう人も遠ざかり (出家199)

(134) 私の気持もいくぶん落着いてきた。(風立148)

(135) お前も変ったね、——もとは決してかうではなかった。(伸子149)

(136) そしてその鶴をもつてこっちを見てゐる影ももうどんどん小さく速くなり、
(銀河305)

エ) 推移主体の感動的な提示。

(137) かうやっていよいよ冬も深くなるのだ。(風立157)

(138) その年も暮れに近づいた。(夫婦19)

(139) もう紅葉もおしまひになるわ。(雪国144)

(140) 初江の手紙も途絶えた。(潮騒131)

(141) ほんにこのごろはお話もことに細々として来たようでございます。

(出家197)

オ) マークしている時期がせまってくることをあらわす。

(142) もはや御最後も迫りました。(出家213)

(143) もはや消燈時間もせまってきたので (真空229)

(144) 去年の暮、正月も近づいた廿日過ぎに (くれ15)

カ) 一定の感動をこめて、主題を提示する。

(145) S村もとんだ姥捨山になったものよ。(厭が290)

(146) かう降っちゃ猿もねぐらに引込んでるだらう。(野火156)

(147) 日本の近代動物学も、明治以降すでにほぼ一世紀の歴史をもつ。(高崎54)

特定のひとが主語になったときに、よくあらわれる。

(148) わしももうずいぶん長く生きたからな (出家204)

(149) 所在のないまま旦那も色んなことを考へる。(末枯69)

(150) 何しろ駿さんもそろそろお父さんの御心配になる年頃におなりになったから、あなたも大抵ぢゃございませんわね。(波373)

(151) ちょッ彼男も余計なことを喋舌しゃべって歩いたものだ。(破戒321)

(152) そしたらいたちも一日生きのびたらうに (銀河309)

キ) 一人称の意志、二人称の命令・すすめのばあいにもよくあらわれる。

(153) わしもすべての呪いを解いてこの世を去りたい。(出家207)

(154) われわれも今度こそは、いやな想いでないよいい将来を祝福して、学問の府を

大阪に設けねば、商売に引けを取るぞ。(総長351)

(155) お前も、少し、落ちつくんだね。(自由371)

(156) あんたも一度あってみてくれるといいんだがな。(子を164)

(157) 維康さん、あんたもふらふら遊んでばかりしてんと、何ぞ働く所を……

(夫婦22)

以上、この報告では、いろんな意味のものを例示するだけで、分類せずにおわった。これは、この研究がまだいたらないからである。また、ここにあげたものでも、他の派生的な用法にまわしたほうがよいものも、おそらくは、いくつかあるだろう。

3. 極端例の提示

佐久間1940は、“助詞「も」の特殊用法”として、

○天人もはだかにされて地ものなり

○外聞をいせやも二代目には知り

のような例をあげ、

「も」が積極的に表現の妥当区域の極限を示すやうな場合に、「……さへ(まで)やっぱり」の感じを伝えることがあります。

とのべ、さらに、その反対に、「ごく平凡なものでありながら、それでも仲間入りをするのだといふ風に表現する場合」もあるとして、つぎのような例をあげている。

○生酔も松の内のは人がよし

○かんざしもさかさに持てばおそろしい

○石屋にも一つか二つ絵の具皿

永野も③でつぎのようにいう。

あまり目立たぬものや極端な思いがけぬ事例を提示することによって、包含される領域がそれにまで及ぶという誇張の意味あいを表現する。(「さえも」「すらも」「さすがの～も」の意を表わす。)

阪田も④で同種のものをとりあげている。

この用法は、それが他のふつうのものと同様であることをしめす点において、同類提示の用法からぬけきってはいないけれども、それが最高なり最低なりをあらわしている点において、単なる同類提示から区別される。

(158) ……恐ろしい猛犬が二疋も三疋も鬨の声を揚げて^か駆け来るに^つては、如何

に豪胆なる盗賊も敗走するに相違ない。(思出191)

(159) フーンと流石の篠原も腕を組むと、彼女は得意さうに鼻を齧めかした。

(故田179)

(160) 秀れた人傑も往々にして感ふ死の前に微笑して(思出224)

(161) 一銭二銭の金も使ひ惜しみ(夫婦21)

(162) その白地が夜目にも鮮かだったからである。(潮騒157)

この用法は、形態的にも形づけられていないし、また、構文形式からみても、「さすがの」のような陳述的な単語と共存しないかぎり形づけられないので、これを文法的にひとつの用法であるとみとめてよいかどうか、いまのところわからない。たとえば、つぎの例は、もし「利根川」を極端にとおいところとみれば、この用法になるだろう。

(89) 土を切り起すことの上手なのは彼の天性である。それで彼は遠く利根川の工事へも行ったのである。(土98)

しかし、この用法のうちの最低をあらわすものは、うちけしと呼応して、つぎの章およびそのつぎの章でのべるような、つよい否定的主張をあらわす用法へ発展する契機をなしているもので、それなりの文法的な性格があるのであろう。阪田1971は、この両用法をひとつの用法としてとらえている。

極端例の提示には、ゆずりのニュアンスをもっているものがある。たとえば、(160)は、「秀れた人傑であっても」といいかえても意味はかわらない。とくに、従属文の述語形式である第二なかどめ形の「も」によるとりたて形(よんでも、たかくても、しずかでも、山でも、など)は、すでにゆずり形への派生をとげてしまっている。そして、名詞の述語形のとりたて形「～でも」は、さらに発展して、べつのととりたて形として現代語のとりたての体系のなかに位置をしめている。したがって、とりたて形「～も」と、とりたて形「～でも」とが、ともに、とりたて形の体系のなかに共存することとなり、このふたつが、ゆずり的なニュアンスをおびると、文体的な対立をもつ。つまり、「～も」がつかわれると、「～でも」にくらべて、文語ふう、あるいは、古風な感じをおびることになる。

4. つよい否定的主張

永野1951は、④として、これをたてた。

- ④ 叙述語を提示し否定の意の語を伴って、強い否定的主張をあらわす。

○～、もう見向きもしないで、～机を積み上げてみた。

○お嬢さまの顔が、うす闇のなかに灰白く浮きあがったまま、下をさしうつむいて、微動もしないのです。

これは、動詞のとりたて形をうちけしにするか、または、名詞のとりたて形をうちけしの動詞とくみあわせるかして、つよい否定的な主張をする用法である。

(163) 霖雨が惘れもしないで降り続く。(土197)

(164) 此れは不審議、此処に梅の木が生へた。植へもせぬに、と驚くだけが愚な話、(思出228)

(165) 源ちゃんの女房は、泣きもしない子の背をたゝいて(太陽136)

(166) 佃が貧しく、社会的背景も持たないため(伸子146)

(167) 塩漬の名も知らぬ輩の味噌汁(高野54)

(168) 明日もも知れぬ危険といふのは(故旧106)

(169) ポリプロピレンの繊維の世界の全産額は、日本一國におけるビニロンの産額にもおよばない。(新し378)

名詞と動詞がともにとりたてられるばあいもある。

(170) ……且も有りもしねえのに……(土207)

化石的にのこっている動詞のふるいとりたて形式もある。

(171) サルを見るのに望遠鏡がいるとは、思いもつかなかったのだ。(高崎44)

この用法は、3とちがって、形式的にうらづけられているので、ひとつの用法としてとりだすことができるだろう。

情態副詞のとりたて形がうちけしの動詞や形容詞とくみあわさって、つよい否定をあらわすことがある。

(172) 轍りは言ひ合はせたやうにびくりとも動かず(闘牛140)

(173) 風はそよとも無いのに(故旧153)

(174) 佃は、固くなって、にこりともせず答へた。(伸子162)

これらの副詞は、現実を反映した、ことがら的な意味をもっている点で、この用法のなかにはいるようでもあり、一方また、かすかさきをあらわすという点では、ていど副詞にちかく、その意味では単なる否定のつよめともとれ、その両方の性質からおして、つぎの章でのべる“数量名詞・ていど副詞による全面

否定”との中間的なものといえるかもしれない。

5. 数量名詞・ていど副詞による全面否定

1 コをあらわす数量名詞やていどのすくなさをあらわすていど副詞の「も」によるとりたて形は、うちけしの述語と呼応して、全面否定をあらわす。

(175) 三年間靴墨はおろか泥さえ一ぺんも落したことはなかったが、色が悪くなっただけで、実質はいささかも損われなかった。(私の25)

“1 コをあらわす”というのは、不連続量としての1、つまり、そのしたは0になるというような量をあらわすことである。

(176) サルは一びきもいなかった。(高崎43)

(177) うめ女は泣いていたが、泪は一滴も出なかった。(厭が305)

(178) 志田先生は、脇の下から冷汗をながしながら、ひとことも返事ができなかった。(人間327)

おなじ1でも、連続量としての1のばあいには、この用法ではない。(第8章)

(179) まだ1分もたっていないかった。(資料外)

これは、連続量であって、1分よりすくないことをいっているが、全面否定ではない。1よりすくない「半分」にしても、おなじである。

(180) けれども、正直に云ふと、伸子は保の云ふことを、半分も聴きしめてはみないのであった。(伸子154)

おなじ単語でも、そのとらえかたによって、連続量にも不連続量にもなるものがある。つぎの「一日」や「一步」は、不連続量をあらわすものとしてつかわれている。

(181) 南に帰ってからも、蘇武の存在は一日も彼の頭から去らなかった。

(李陵196)

(182) 彼は群がる蛇を睨み据ゑて一步もたじろがなかった。(太陽270)

つぎのような「ひとつ」は両様にとれるだろう。

(183) おれがまだひとつもくわないうちに、あいつはもうみつもくってやがる。
(資料外)

この文は、「おれが」まだくいはじめないばあい (不連続量) と、まだくいおわらないばあい (連続量) の両方をあらわしうる。

ていどのすくなさをあらわすていど副詞の「も」によるとりたて形としては、つぎのようなものがある。

(184) しかし佐助はその暗闇を少しも不便に感じなかった。(春琴153)

(185) 慎太さん、^{おまへさん}郷ま^{ちよいと}あ一寸も顔見せんぢゃねへか(思出231)

(186) 陸に住まうが、海に行かうが、しばらくも離れずにあることが、この際二人に最も必要である。(河明340)

ちいさなものをあらわす名詞の「も」によるとりたて形をこの用法につかうこともある。

(187) と、いって、未亡人ですから、その息子さんとどうのかうのなんてことは、微塵もありやしません。(波372)

(188) 「滝のことをのべているなかで」之は川の一巾を裂いて糸も乱れず(高野67)

松下1930や阪田1971は、この用法を前章の用法といっしょにしているが、この両用法は、構文機能上の性質をことにするので、べつの用法とすべきだともう。永野1951は、「何の関係もない」などといっしょにしているが、これもおなじ理由でわかるべきである。

前章のばあい、(164)の「植えもせぬに」にしても(166)の「背景も」にしても、現実反映の意味をすてたわけではなく、ただ、そのうえに陳述的な意味がくわわただけであって、とりたて形になっても、依然として述語であり、対象語である。ところが、本章でのべている用法では、もはや現実反映の意味はうすくなって、もっぱら否定のつよめという陳述的な意味をになわされている。そして、とりたて形になることによって、修飾語から陳述語への転化をとげている。^{注26)}つまり、構文機能上の性格が変わったわけである。これが前章でのべた「も」の用法とのちがいであり、また(172)～(174)が中間的であるということの理由でもある。

さらに、ここにあげた、ていど副詞やちいさなものをあらわす名詞のばあいには、そのような構文機能においてくりかえしつかわれたため、とりたて形がひとつのあたらしい派生語となって、陳述副詞に転成しているといったほうがよいかもされない。もし、そうだとすれば、それは、現代語のシステムのなかではとりたて形ではないので、この論文の直接の対象ではないだろう。

6. 一対の語による代表的提示

佐久間1940は「共説の代表的提挙および全面的否定」という節をたてた。^{注27)}

○あちらでもこちらでも蛍を呼ぶ声がします。

○それもこれもみんなわたしのせいです。

○母じまん、やれそっからもこっからも

こゝでは、なぜ前の例とちがふかといふと、事はコソア下の指示の語に関してあるのですが、その定称のものには、いはゆる近称・中称・遠称の三とほりがあります。そのうちにこゝに コ（これ・こっち）と ソ（それ・そっち）との一対か、あるいは コ（こちら）と ア（あちら）との一対かが「……も……も」の形で連ってあります。形式的にいふと、三つのうち二つが一対に編成されてあるわけですが、その意図は「甲も乙も丙も丁も……」と無数に挙げたいところを代表的に二つ一組にしてあげてあるのに外ならないのです。でたゞの枚挙ではなくて、代表的に、「以下倣之」的に提出してあるわけです。娘一人に婿八人といふやうな事態において、母親のじまんが高調に達するわけです。「そっからもこっからも」とは、その事態を有効に表現するものとして選ばれたのにちがひありません。

佐久間は、このあと不定称のド系にすすむのだが、そのことは、つぎの章にまわす。永野はこの用法をつぎのようにいう。

一対の語を挙げ、それを代表とする他のすべての場合に通じさせる。

永野は、コソアだけでなく、名詞のばあいもここにあわせている。

○いなかから、いきなり大都會のまん中へほうり出されたんじゃ、西も東もわからなくなるのは、あたりまえじゃないか。

永野の例は慣用句的であるが、一対のとりたて形が全体を代表することは、慣用句でなくても、よくある。

(189) それでは私のこれまでの抑留も、決定も、みんな幻想にすぎなかったのであろうか。(野火144)

(190) 再び伸子が部屋に戻った時、彼はまだ机の右にも左にも本を拡げて、その間に坐ってゐた。(伸子182)

(191) ああいわれて、嬉しくも痒くもなくてその反対だったことなんか問題じゃないんだ。(むら312)

これらの例は、みんな、その二つのあいだに同類性があり、また、文中の他の単語に対する関係も等価であって、その意味では、同類提示の用法としても成立している。また、構文的にも、それを同類提示から区別しなければならない理由もなく、ただ、意味のうえで代表性をもっているだけである。その点から、この用法は、第3章のばあいと同様、ひとつの用法としてとりあげる必要はないかもしれない。

しかし、これは、つぎの章へのはしわたしになる点、および、おおくの慣用句をうみだしている点において特徴があるといえるだろう。

さきに永野の例が慣用的だといったが、そのほか「おいもわかきも」「ねこもしゃくしも」「あとにもさきにも」「ねてもさめても」など、いろんな語形で慣用句をうみだしている。石垣幸雄 1958「クリカエシ<REPETITION>」も「押しも押されもせぬ」^{注28)}「いても立っても」「ねてもさめても」「あけてもくられても」「にっちもさっちも」^{注29)}などの例をあげている。

7. 不定称の語をふくむ一対の語による代表的提示

佐久間は、前章にあげた例のあとに、“いわゆる不定称のD系およびそれに準じるもの（「なに」など）と近称のC系（および音韻的に近似するもの）との組合はせ”の例をあげている。〔1952年版は、すこし、かきたしている。〕

- (人) だれもかれも
どいつもこいつも
- (事物) なにかかも（「カニも」ユーフォニーの例もある）
どれもこれも
- (処) どこもここも（かも）
- (時) いつもいつも
- (様子) どうもこうも

このばあいには、どんなばあいにも全面的肯定または全面的否定になる。

- (192) さうすれば今までのことが何もかもばれて了ふ。(多情360)
- (193) 年寄りに対して肉身のたれもかれも薄情であり(厭が296)
- (194) おかみさんはどこもかしこもちゃんと綺麗になってあると仰って青木さんに賞めてお出になる。(桑の148)
- (195) 〔シカは〕どれもこれも毛色がおなじだから、〔個体識別が〕ウマの場合よりもいっそう困難だった。(高崎29)
- (196) どれもこれも確な思い出はない。(私の22)

このばあいには、「どれも」と「これも」が同類だといっているのではないので、意味のうえからみて、もはや同類提示ではない。また、「も」によるとりたて形のはあいの並立は、ならべ形による並立とちがって、^{注30)}ひとつひとつがそれぞれ同等の資格で文中の他の部分にかかわっているはずなのに、こちらは、二つのとりたて形のまとまりが他の部分にかかわっている点でもことな

ている。

「それもこれもわたしのせいです。」は、「それ」と「これ」がそれぞれ特定のものごとをさすことができ、また「それもわたしのせい、これもわたしのせい」といえるのに対し、「どれもこれもわたしのせいです。」は、そういう分析ができない。つまり、意味と構文機能の両面において、もはや同類提示から変質してしまっているのである。

この二語のくみあわせは、まとまって「すべて」「ぜんぶ」のような全数をあらわす数量名詞にちかくなっている。そのことは、単に意味のうえだけでなく、つぎのようにふたつの構文機能的な性格をおびてきていることからいえる。

そのひとつは、格形式をもつことである。

(197) どれもこれもが写楽の目に映ったような一種のグロテスクなおもしろみを持って、彼の目に映って来た。(暗夜255)

(198) それほど私には、その何もかもが親しくなっている。(風立162)

もうひとつは、ていど修飾語と陳述語の間のような機能をもつことである。

(192) さうすれば今までのことが何もかもばれて了ふ。(多情360)

この章にはいるとおもわれる用法に、もうひとつ、「～モ ナニモ」というくみあわせがある。

(199) 二三日泊めることは安いことだけれど、お米も何もないのよ。(放浪278)

(200) 屑書きも何もない彼の名刺など出したところで、何ものであるか、知る由もない。(生活252)

これも、意味と機能の面で同類提示的でないことによって、ここにあげるわけである。これは、まえの名詞が語的に自由である点において、まえのものが語的に固定して一語化のきざしをみせているのとくらべて、より文法的であり、こっちのほうが、この章にとって典型的だといえるかもしれない。

付. 不定称の語のとりたて形からの派生

佐久間は、「だれもかれも」などにつづいて、“不定称の語に「も」がついた場合”のことをのべている。

- (人) だれも来ない。
 (どなたも)お見えになりません〔時として〕お留守です、)
- (事物) なにも〔ナンニモ〕ない。
どれも役に立たない〔だめだ〕
- (処) どこもすいてみない〔満員だ〕
- (方角) どちらもいけない〔行きどまりだ〕
- (方法) どうも仕方がない〔困った〕
- (時) いつもうちにゐない〔出てゐる〕

そして、だいじなことは、これを派生語とみていることである。

これらは熟して一語となったものと見る事が出来るのでして、往々アクセントの著しい変化を遂げてゐることを指摘したいと思ひます。

また、このアクセント変化だけでなく、意味についても、

かういふ風な表現の手段は、全面的な否定、手づよい否認の場合に適用されて効果を發揮するものです。

のように、陳述的な意味の生じることをあげている。

佐久間のこのかんがえを補強するために、もうひとつ機能面からのうらづけをほどこすならば、それは、この派生語が、おおくのばあい、佐久間のあげた例文のようにではなく、つまり、主語や対象語のようにではなく、同格の独立語的成分というか、陳述語のようにつかわれることである。この傾向は、「これもこれも」のばあいよりもつよい。

(201) それ以外に頼るものは何もなかった。(春琴154)

(202) そして何も根拠のないこの不安に(くれ40)

(203) はるかな宇宙空間にみられる星空はどれもみな銀河系から遠ざかっている。

(宇宙9')

以上は陳述副詞化へのみちについてのべたのであるが、いっぽうでは、全称の代名詞へのみちもあゆんでいて、そこでは格があらわれる。(ただし、「なにも」「どうも」はべつ。)

(204) どれもがうつくしく、気がきいている。(高崎17)

(205) 仕舞ひ頃には、伸子を除いた誰もが、初めの一寸した心持の引懸ひつかかりは忘れてしまった。(伸子175)

つぎのような例が、もしハダカ格のよびかけをあらわす用法だといえるところなら、あたらしい代名詞への転化はかなりすすんでいるといえよう。

(206) どなた様も、今が御臨終でございますぞ。(出家218)

なお、このあたりのことは、さきにあげた(91)例などといっしょにして考察をふかめる必要があるとおもわれるが、いまのところ、ほかにデータをもちあわせないので、ふかいることはさけない。

g. 強 調

数量名詞の「も」によるとりたて形は、強調、または、“おおよそのていど”の例示のはたらきをもつ。

(207) 現場から、百メートル余も、離れとるのですから(自由355)

(208) 一人あて五合もありゃ、まあよからうわい。(生活176)

まえの例が“強調”で、あとの例が“おおよそのていどの例示”である。後者については、つぎの章でのべる。

数量の強調には、その数量がおおきいぞと強調する大量評価強調とちいさいぞと強調する小量評価強調とがある。

述語が肯定であるばあいには、大量評価になる。

(209) だけど、いまは、私もあれから十年も年令をとりました。(放浪301)

(210) 春琴の家には奉公人が五六人も使はれてある(春琴176)

(211) 八十六にもなって(厭が297)

(212) 便箋十枚にもあまる速達の手紙を書き(潮騒150)

1 単位、または、それよりちいさい数量であっても、述語が肯定であるばあいには、大量評価になる。

(213) 叔父の家へ一カ月も泊っているというのは(自由336)

(214) 今回の“イケヤ・セキ慧星”は、あの場合より更に十分の一も太陽に接近するから大変である。(未知321)

述語が否定のばあいには、小量評価になるものと大量評価になるものがある。つぎの例は小量評価である。

(215) 出発後まだ五日もたっていない今(読切倶楽部 1956.8. p.292)

(216) 季節が暑くなれば雨があって三日も見ないうちには雑草は驚くべき迅速な発達を遂げる。(土97)

(217) まだ三つにもならない彼の子供が(機械8)

1 単位をあらわす単語でも、それが連続量ならこれになれる。

(218) 一寸にも足りないわらじ(自由362)

つぎの例は大量評価である。

(219) 石川君、もう三日も飯を食わないが、まだ強情を張るのかね。

(土方鉄1973「狭山の黒い雨」85場)

(220) 何だい、十日も寄りつきやがらないで、どっかにいいコレでもできたのかい？

(長谷川和彦1974「宵待草」31場)

(221) やつはオリンピック選手じゃないんだから、1時間に20キロもはしれないよ。(資料外)

不定の数量詞のばあいも、同様にはたらく。

肯定のばあい

(222) その火がいまでも燃えてるって、あたし何べんもお父さんから聴いたわ。

(銀河308)

(223) 晴れた夜空を、ホーキ星の赤い尾が幾重にも横切って行くという。

(未知321)

否定のばあい

(224) 浜にはいくらも人が出てゐなかつた。(波382)

(225) 現在は地元の小学校ですから何程もかかりませんが

(婦人之友 1956. 11. p. 114)

(226) 柳吉は或る日ぶらりと出て行った儘、幾日も帰って来なかつた。(夫婦29)

曾我松男1975「係助詞「も」の構造についての一考察」は、その「2. 強調の「も」と数量詞」において、この問題をあつかっている。この論文は生成文法の方式をつかって説明をこころみているが、要するに、その数量詞による修飾が述語のさししめすことがらのもつうちけしをふくめた側面にかかるか、うちけしをふくめない側面にかかるかによって、大量評価になるか小量評価になるかがきまるといふものである。

(37) ビールは三本も飲まなかつた。

(38) 学生は十人も来なかつた。

(39) 戸は三つもあかなかつた。

上例(37)は、「ビールを二本ぐらいしか飲まなかつた」というような場合にも使えるし、「飲まないビールが三本も残った」というような場合にもいえるだろう。例文(38)は、「学生が九人ぐらいしか来なかつた」というような場合にも、「来ない学生が十人いた」という時にも言えるはずである。例文(39)は、「戸が二つぐらいしかあかなかつた」というような場合にも、「あかない戸が三つあった」というような場合にも言えるだろう。これらのいずれも、前者は量

の少なさを強調し、後者は量の多いことを強調している。

てとりばやくいえば、「十人来なかった」の「も」によるとりたてならば大量評価、「十人は来なかった」のとりたてならば小量評価だということである。他の例もこれで説明できる。

曾我のこの論文は、数量名詞の「も」によるとりたて形のもつ強調のあらわれかたの傾向をみいだした点において評価される。しかし、これは傾向であって、絶対ではない。うちけしの意味までふくめた側面において述語にかかるばあいにも、ふくめない側面において述語にかかるばあいにも、大量評価強調と小量評価強調があるのである。

まず、うちけしの意味までふくめた側面にかかるばあいにも、小量評価になるものがある。(216)はその例で、そのことがらの意味は見ないのが三日ということであって、三日よりすくない一日とか二日ということではない。しかし、これは、「たったの三日」という意味、つまり、小量評価である。

つぎに、うちけしをふくめない側面にかかるばあいにも、大量評価になるものがある。(221)はその例である。「20キロも、そんなに多くは」の意味である。曾我のあげた「十人も来なかった」が「九人ぐらいしかこなかった」の意味であるばあいにも、「十人？ そんなにたくさんはこなかった」というばあいもあるのである。

しかし、曾我のいっていることは、傾向としては、たしかにそうなのであって、じっさいの使用例も曾我の説明のあうものがおおい。つぎの例のようなばあい、「やしなえませんか」としてもよいのだが、じっさいには、この例のような分析的な述語になるものがおおいのも、この傾向のあらわれだろう。

(227) だけど、私が三日も四日も養うわけにゆきませんから。(人間35)

この章でのべている“強調”の用法のうち、つぎの例を、阪田1971は、“⑧ 時間・数量などの限界を表わす”もののなかにいれている。

○一つ百円もしない。

このばあい、“限界”をあらわしていることはまちがいではないが、「一つ百円はしない」のばあいも“限界”をあらわしており、これを「も」によるとりたて形の特徴だとはいえない。というより、むしろ“限界”は、「は」による

とりたて形のほうにふさわしいだろう。「も」によるとりたて形のばあいは、ひじょうに安いねだんとしての“百円”，あるいは、ひじょうに高いねだんとしての“百円”よりたかくないことを強調しているとみたほうがよいだろう。

大量評価強調の「も」によるとりたて形は、あとに「の」がくっついて、連体的にもつかわれる。

(228) お前なんでそんな金をとった位で二年もの刑になるなんておかしいやないか
いうてな (真空197)

(229) この無数の星雲のひとつひとつが百億も千億もの恒星の大集団であって
(宇宙90)

(230) 眼を窓に向けると、窓外はいつか暗くなって、窓硝子に室内の暖気が幾十もの水滴を流してゐた。(関牛131)

不定称のばあいには、「が」がついて、格形式となることがある。

(231) 小船が大泊り湾を出るとき何頭もが、岩にならんで見おくっていた。
(高崎22)

大量評価，小量評価に似たものとして，副詞に「も」のついたものがある。これらも，ていどのつよいことをあらわすが，いまのところ，大量評価・小量評価といえるかどうかわからない。

(232) 奈良の公園に，シカがいることは，むかしからあまりにも有名であるが，
(高崎28)

(233) 天漢三年の秋に匈奴が又もや雁門を犯した。(李陵184)

(234) どうしてああも生きてるんでしょうね。(厭が297)

(235) 彼女は，更めて，こんなにも厄介な良人というものを考えてみた。(自由351)

(236) 私は屋敷のそんなにも元気になったのに驚いたが(機械30)

(237) そんなに訳なくも出来ないけれど(桑の137)

(238) よくも伺ひませんでしたけれど(破戒316)

(239) 深くも追及しかねるので(春琴166)

9. おおよそのていどの例示

阪田は“⑧時間・数量などの限界を表わす”として，つぎの諸例をあげた。

○三日もあればできるでしょう。

○一つ百円もしない。

○おそくも九時までには帰ります。

このうち，第2例については前章でのべた。また，第3例は，「おそくても」

「きれいでも」などと同様、ゆずり形としてあつかうべきものであるので、今回の研究の対象としてはとりあげなかった。

第1例のばあい、この例はたまたますくない例であるが、おおい量のばあいもあり、また、意味からいっても、「三日以内」ではなく、だいたい三日ぐらいということであり、限界というのは、まずいだろう。

教科研1963は、「3. 大体の数量を表わす」として、つぎの例をあげている。^{注31)}

○そこから 十キロも 歩いたかと 思われる ころ、日が くれた。

○あと 二百円も あれば あの 万年筆が 買えるのだが。

ここには、推量的な表現と呼応する例と、条件形と呼応する例があがっているが、永野1951と鈴木1972aは、それぞれ前者・後者の構文的条件を積極的に記述している。永野は“おおよその程度の例示。(推量・疑問などの意味が後続する。)”として、つぎの例をあげた。

○二十メートルもあろうかと思われる高い天幕のてっぺんではハシゴ乗りの曲芸が始まっている。

鈴木は“条件句のなかで大体の数量をあらわす。”として、つぎの例をあげた。^{注32)}

○あと 三年も すると、この 自動車は つかいものに ならなくなる だろう。

曾我もこの種の問題にふれ、つぎの4例をあげて、「いずれも、最大値の強調か最小値の強調か、あいまいである。」とのべている。

(52) 三十マイルも行ったでしょうか。

(53) 三十マイルも行けば、次の町に着くはずです。

(54) 一万円もありますか。

(55) 一万円もあれば、大丈夫ですよ。

条件句・節や、推量文のなかでこの用法があらわれるのだが、はじめの三者が、おおよその数量をあらわす一つの用法だとみているのに対して、曾我は二つの用法があって、そのどちらかということがあいまいなのだというふうにみている点がちがっている。

ここにあげたような例文は、そのとりたて形でつかわれた単語のところ

ロミネンスをおけば、条件句・節、推量・疑問文のなかでつかわれていても、強調になるが、ふつうのばあいには、だいたいの数量をあらわすとおもわれるので、ひとつの用法とみることにした。

(240) 一人あて五合もありゃ、まあよからうわい。(生活176)

(241) 大抵五銭も出せば立派なものが一尾^{びき}買へる。(思出200)

(242) だが一週間も経つと、件の立派なりボンが埃と脂で黒光りする様になった。
(故旧201)

(243) もう一日もしないと優勝の見透しがつかないという意味であろう。

(ベースボール・マガジン1956.11.p.88)

10. その他の用法

以上のべたほかに、まだ位置づけのできないいくつかの用法をここにあげておく。

1) 副詞のとりたて形のうちのあるもの

松下1930は、“特殊の用法”のなかで、“条件を附加する「も」”として、「早くも風を食って逃げてしまった。」などの例をあげ、つぎのように解説している。

彼は風を食って逃げた。而も^{おまけ}に早くだよ。逃げただけなら驚くに当たらないが早くといふ条件^も加ってゐる。

の意で、「且加レ之」の意がある。「一」を認めるのみならず「＝」をも認める意である。

この用法は、とりたて形にすることによって、はなしての（小説の地の文では、主人公のばあいも）評価・解釈的な要素がつけてわかるようにおもわれる。

(244) ところが先生は早くもそれを見付けたのでした。(銀河243)

(245) あえなくも菜っぱと小鳥の感傷が、桃色の甘い綿菓子に変わってしまった。
(放浪288)

(246) 意外にも彼女はにべもなく峻拒した。(春琴166)

(247) 幸ひにも未亡人をもう一度ヒステリにするやうな相手に出逢はないうちに彼等はどうか買物をすました。(真知159)

(248) この荒療治のお蔭で、不幸にも蘇武は半日昏絶した後に又息を吹返した。
(李陵191)

(249) この斎藤が不遜にも文学のことを気にかけてるのだナ。(むら320)

(250) その代り細君の朋子へ、懐しい気持が集中されて、珍らしくも信之は、優しい愛撫を与へたりした。(多情349)

(251) そういうお前がだな、よくも正月のような時に家を空けられたよ。(くれ26)

2) 「～のひとつも」という表現

「～のひとつも」という表現は、一定のモーダルなニュアンスをおびている。たいしたことはないが、それでも一定の価値はあるというようなニュアンスである。

(252) 篠原は冗談のひとつも言ふ心算であったが、(故旧183)

(253) 少なくとも、手土産代りに、スーツの一つも、買ってやれる財力と共に駒子の許へ帰る必要がある。(自由336)

(254) おきんは芸者上りのヤトナ数人と連絡をとり、派出させて仲介の分をはねると相当な儲けになり、今では電話の一本も引いてみた。(夫婦17)

3) 名詞の「も」によるとりたて形と形容詞のくみあわせ

「足どりもかるく」「こころもうきうきと」のように、名詞の「も」によるとりたて形と形容詞がくみあわさって、副詞句になるものがある。

(255) 女中もそっけない切口上で、畳ざはりも荒々しく出て行った。(多情303)
とくに、「～モ ナク」「～モ ナシニ」は、おおくの例がある。

(256) 私が理由もなく殴られたので(機械30)

(257) 曇もなく、晴れた空は(野火140)

(258) 前ぶれもなく昔風な土間の入口に立った。(多情300)

(259) 彼は別に根拠もなしにその女をおとなしい、素人くさい、善良な女というふうにいつか心で決めてしまっていた。(暗夜259)

(260) けさから殆んど小止みもなしに降りつづいてゐる。(風立156)

これらは、「も」でとりたてられないばあいは、ハダカ格であらわれるとおもうが、(255)のようなばあい、「畳ざわり荒々しく」とはいえそうになく、構造の分析がよくできない。永野は「際限もなく」「年甲斐もなく」「すきまもなく」などを、阪田は「際限もなく」を“強調”としているが、もし強調であれば、この連語ぜんたいの意味を強調するてつづきとして、名詞をとりたて形にするのであろう。

これらのくみあわせで固定したものもたくさんある。

アテモナク、エンリョモナク、オトモナク、クックモナク、コノウエモナク、サイゲンモナク、トメドモナク、ニベモナク、ナニゴコロモナク、ハテシモナク、ホドモナク、ワケモナク、イチモニモナク、など。

また、形容詞句として固定したのもおおい。

アテモナイ、カクレモナイ、クツクモナイ、コノウエモナイ、スベモナイ、ゼヒモナイ、ゾウサモナイ、トリトメモナイ、ムリモナイ、ワケモナイ、シルヨシモナイ、など。

4) 句・節・文のパターンとして位置づけなければならないもの

松下1930は、「も」の特殊の用法」として、いろいろのパターンをあげている。これに佐久間、阪田のつけくわえたものをふくめて、ここにあげておく。

- a) ○飲みも飲んだものだなあ。三人で四升飲んだぜ。(松)
○泣きも泣いた、一時間ぶっとほしサ。(佐)
○正宗を切れさうなどはほめもほめ(佐)
○飲みも飲んだり、一晩で二升もあけてしまった。(阪)
- b) ○わっちらが内も内さと門に立ち(佐)
○北も北、北海道の果だ。(阪)
- c) ○「御迷惑ですか。」「あゝ迷惑も大迷惑だ。」(松)
○「彼奴は少し馬鹿の様だなあ。」「あゝ馬鹿も底抜の大馬鹿野郎だ」(松)
- d) ○私の店は東京も銀座の真中です。(松)
○東京も神田の生まれですからね、本当の江戸っ子ですよ。(阪)
- e) ○学生も学生だが学校当局の態度もよくない。(松)
○子どもも子どもだが、親も悪い。(阪)
- f) ○資格も資格だが実力が第一だよ。(松)
○繻致も繻致だが素行を調べる必要がある。(松)
○飯も飯だが先づ一杯遣らう。(松)
○飯も飯だが、まず酒だ。(阪)
○「スープがぬるくなってしまったでしょう。」「ぬるいもぬるいが、塩気が足りないね。」(阪)
- g) ○よく出来てらあ、亭主も亭主なら女房も女房だ。(松)
○亭主も亭主なら、女房も女房だよ。(佐)
- h) ○君も君ぢゃないか。しっかりしろよ。(事情も事情だらうが)(松)
- i) ○働くことはよく働くが食ふこともよく食ふ。(佐)

これらは、とりたてて形の用法の問題であるというよりは、とりたてて形をふくむ句なり節なり文なりのパターンの問題である。たとえば、e)～i)は、いずれも、とりたてて形の用法としては、同類提示であって、特殊なのは、そのパターンである。だから、これを解明するには、構文のパターンを研究しなければならない。そのためには、特殊でない主述構文についての基礎的な理論が必要で

あろうし、また、たとえば、つぎのような「も」によるとりたて形をつかわない特殊構文との比較も必要であろう。

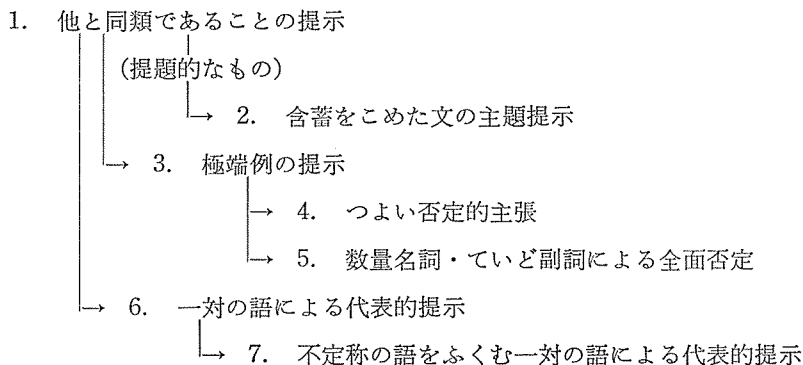
- しごととはしごとだから、さぼれない。
- しごとがしごとだから、さぼってもよい／さぼれない。

お わ り に

「も」によるとりたて形の記述をすすめるにあたって、つぎのような観点にたった。

- 1) 形態論的な観点から、その語形の性格とかたちつくりのてつづきを記述した。
- 2) その語形のもつ文法的な意味を、その語形のもつ構文機能との関連で記述した。
- 3) この語形が多義的・多用法的であるとみとめて、そのどれが基本的であり、どれが派生的であるかをみわけ、その派生の経過をみようとした。
- 4) 基本的な用法から派生的な用法へと発展していくばあい、その意味ないし機能は、なんらかの意味で変質していくのであって、そのため、全用法を通じて共通の意味があるという保証はないのだというかんがえかたにもとづいて記述した。

「も」によるとりたて形のいろいろな用法の関係は、つぎのようなものとみられる。



関連づけられなかったもの

8. 強調
9. おおよそのていどの例示
10. その他の用法

注

- 1) 単語の認定の問題は、鈴木重幸1972b「文法と文法指導」の「第2部 学校文法批判」51～121ページにくわしくのべられている。
- 2) 63ページと178ページ。
- 3) 国立国語研究所報告3「現代語の助詞・助動詞——用法と実例——」は、その「刊行のことば」と「はしがき」に永野賢所員が担当したとかかかれているので、以下「永野1951」と略す。
- 4) 以下、阪田1971と略す。
- 5) 184ページ。
- 6) ふたつ以上の単語のくみあわせによる一語形相当のまとまりを分析的な語形 analytical form とよぶ。たとえば、市河三喜「英語学辞典」の「Conjugation」の項には、“英語の活用の単純化は総合的 (synthetic) な文法形式が OE 以後 ME を経て次第に分析的 (analytic) になったものである。”のような説明がある。
- 7) Lesson 18
- 8) この本は明星学園・国語部 1968「にっぽんご4の上」の解説書でもある。明星 1868は鈴木1972に先行するが、鈴木1972のほうが説明がくわしいので、参考資料としては、こちらをとることにした。
- 9) 動詞や形容詞などの性質を有しながら、格など名詞的なカテゴリーをそなえているものこと。「つり」「ひかり」などは、語いの派生名詞であって、これでない。
- 10) ひとつの動詞相当の語形変化の組織をもつ、派生形式。文法的な性格をかえるけれども、語いの性格をかえないので、このようによぶ。たとえば、うけみ相の「よまれる」、持続態の「よんで いる」などは、もとの動詞「よむ」が「よむ——よんだ——よもう——よめ」と語形変化をするのと同様に、「よまれる——よまれた——よまれよう——よまれろ」「よんで いる——よんで いた——よんで います——よんで いろ」のように変化する。しかし、「よまれる」「よんで いる」は、語いの性格が「よむ」とかわったわけではなく、字びきの見出しにもたえられない。このようなものが文法的な派生動詞である。「よみも する」は、「よみも する——よみも した——よみも しよう」のように語形変化する。
- 11) 「よんでも」「たかくても」のような形を鈴木1972aでは“逆条件の形”とよんでいるが、わたしは“ゆずり形”とよぶ。(高橋1975参照。) なお、永野1951は、この

- 語形のうちの、うしろの部分「ても」をきりはなして、“接続助詞”としてあつかっている。
- 12) いわゆる“形容動詞”をふくむ。なぜそうするかについては、鈴木1972aの428～432ページ、高橋1975の173ページにかかっている。
 - 13) 形容詞やいわゆる“形容動詞”のいわゆる“連用形”には、形容詞の中止形としてとらえるべきものと、副詞としてとらえるべきものがある。ここにあげたものなかには、その後者に属するものがふくまれる。
 - 14) コピュラは、もともと、名詞を述語形にするためにくみあわせる補助的な単語であるが、もうすこしひろくとして、述語に一定のモーダルな性格をあたえる補助的な単語までふくむこととする。このことについては、鈴木1972aの「第16章 むすび」を参照されたい。
 - 15) この規定は、布村1975から引用した。
 - 16) 奥田1967「語彙的な意味のあり方」は、多義語の基本的な意味は、“その存在が文のなかでの単語の機能、連語の構造、単語の形態、慣用句にしばられていないということから、自由な意味とよぶことができる。”といているが、これのアナロジーは、文法的な意味のばあい、つまり、多義的・多用法的な語形の基本的な意味のばあいにもなりたつだろう。
 - 17), 18) 永野1971も文の成分でわけて例をあげているが、それはこの報告でのとらえかたがちがっている。たとえば、この報告では、objectのことを“対象語”とよんでいるが、永野1951は、objectのうち、感情形容詞に支配されるものだけを“対象語”とよび、他は“連用修飾語”としてあつかっている。
 - 19) 「ボクハ キミガ スキダ」「カレハ エイゴガ ハナセル」「ゾウハ ハナガ ナガイ」「カレハ ザイサンガ アル」などのこと。
 - 20) “題目語”は、教科研1963による。
 - 21) 鈴木1972aの231ページからの引用。
 - 22) 654ページ
 - 23) 657ページの表
 - 24) 233ページ。1952年版の222～223ページは、いいまわしがすこしちがう。
 - 25) 349ページ。
 - 26) 「陳述語」は教科研1963による。
 - 27) 236ページ。1952年版では225ページ。
 - 28) 40ページ。
 - 29) 42ページ。
 - 30) 「ならべ形」とは、いわゆる“並立助詞”のついた語形。なお、このことは、1-1のあとのa)でのべた。
 - 31) 80ページ。
 - 32) 239ページ。

資 料

資料は、主として「動詞の意味・用法の記述的研究」等でつかわれた文学作品・論説文などのカードを利用し、あわせて、「現代雑誌九十種の用字用語」の調査につかわれたものや、現在おこなっている「現代日本語文法の記述的研究」のために採集したのも、すこしくわえた。あとの二者については、出典をそのまま例文にかきそえておいたが、前者の資料は、つぎのとおりである。なお、例文にそえた二文字は作品名の最初の二文字、数字はページである。

〔文学作品〕

1900	泉	鏡	花	高野聖	岩波文庫	
1901	徳	富	健次郎	思出の記(上)	〃	
1906	島	崎	藤	村	破戒	〃
1910	長	塚	節	土(上)	〃	
1913	鈴	木	三重吉	桑の実	〃	
1916	倉	田	百	三	出家とその弟子	〃
1917	久保田	万太郎	末枯	新潮文庫		
1921	志	賀	直	哉	暗夜行路(前)	岩波文庫
1923	宇	野	浩	二	子を貸し屋	新潮文庫
1923	里	見	淳	多情仏心	岩波文庫	
1923~24	滝	井	孝	作	無限抱擁	新潮文庫
1926	宮	沢	賢	治	銀河鉄道の夜	岩波文庫
1926	宮	本	百合子	伸子(上)	〃	
1928	山	本	有	三	波	〃
1928~29	徳	永	直	太陽のない街	〃	
1930	林	芙	美	子	放浪記	新潮文庫
1930	横	光	利	一	機械	〃
1930	野	上	弥	生子	真知子(前)	岩波文庫
1932	谷	崎	潤	一郎	春琴抄	〃
1935~36	高	見	順	故旧忘れ得べき	新潮文庫	
1936	佐	多	稲	子	くれない	〃
1937	島	木	健	作	生活の探求	〃
1937	川	端	康	成	雪国	岩波文庫
1938	堀	辰	雄	風立ちぬ	〃	
1939	岡	本	かの	子	河明り	新潮文庫

1940	織田作之助	夫婦善哉	〃
1943	中島敦	李陵	〃
1947	丹羽文雄	厭がらせの年齢	〃
1948	大仏次郎	帰郷	〃
1949	田宮虎彦	落城	〃
1949	井上靖	闘牛	〃
1950	獅子文六	自由学校	〃
1951	大岡昇平	野火	〃
1952	野間宏	真空地帯	岩波文庫
1954	三島由紀夫	潮騒	新潮文庫
1954	中野重治	むらぎも	〃
1959	石川達三	人間の壁	〃

〔論説文など〕

1916	河上肇	貧乏物語	岩波文庫
1919~22	阿部次郎	人格主義	角川文庫
1920~41	三木清	人生論ノート	新潮文庫
1934~51	小林秀雄	私の人生観	角川文庫
1946	武谷三男	革命期における思惟の基準	(現代日本思想大系25・科学の思想Ⅰ) 筑摩書房
1948	湯川秀樹	物質世界の客観性について	〃
1936	長岡半太郎	総長就業と廃業	〃
1961	梅棹忠夫	高崎山	(現代の教養6・学問の frontline) 筑摩書房
1965	小尾信弥	宇宙の謎はどこまで解けたか	〃
1964	藤田信勝	物質の根源と宇宙を結ぶ	〃
1964~65	朝日新聞学芸部	学問の動き	〃
1965	石田英一郎	抵抗の科学	〃
1966	関つとむ	未知の星を求めて	〃
1966	渥美和彦	人工心臓を体内に	〃
1966	桜田一郎	新しい繊維	〃
1966	坂井利之	文字を読む機械	〃

引用文献

- 石垣 幸雄 1953 「クリカエシ<REPETITION>」 名古屋大学文学部言語学研究室(ガリ版ずり)
- 奥田 靖雄 1967 「語彙的な意味のあり方」(「教育国語8」 妻書房)
- 教科研東京国語部会・言語教育研究サークル 1963 「文法教育・その内容与方法」

麦書房

- 工藤美沙子 1964 「ハとモ」(時枝誠記・遠藤嘉基「講座現代語6, 口語文法の問題点」明治書院)
- 阪田 雪子 1971 「も」(松村明「日本文法大辞典」明治書院)
- 坂梨 隆三 1971 「連用形」(松村明「日本文法大辞典」明治書院)
- 佐久間 鼎 1940 「現代日本語法の研究」厚生閣
- 佐久間 鼎 1952 「現代日本語法の研究」恒星社厚生閣
- 佐治 圭三 1975 「現代語の助詞「も」——主題, 叙述(部), 「は」に関連して——」(「女子大文学・国文篇26」大阪女子大学国文学科紀要)
- 鈴木 重幸 1972 a 「日本語文法・形態論」麦書房
- 鈴木 重幸 1972 b 「文法と文法指導」麦書房
- 曾我 松男 1975 「係助詞「も」の構造についての一考察」(「日本語教育26号」日本語教育学会)
- 高橋 太郎 1975 「幼児語の形態論的な分析——動詞・形容詞・述語名詞——」(国立国語研究所報告55)
- 永野 賢 1951 「現代語の助詞・助動詞——用法と実例——」(国立国語研究所報告3)
- 布村 政雄 1975 「連用・終止・連体……」(「国語国文6」宮城教育大学)
- 松下大三郎 1924 「標準日本文法」紀元社
- 松下大三郎 1930 「標準日本口語法」中文館
- 1961 同復刻版(白帝社)
- 宮地 敦子 1967 「も」(「国文学42-1」学燈社) おなじものが松村明1969「古典語現代語・助詞助動詞詳説」学燈社にもせられている。
- 宮田 幸一 1948 「日本語文法の輪郭——ローマ字による新体系打立ての試み——」三省堂
- 明星学園・国語部 1968 「にっぽんご4の上」麦書房
- 山田 孝雄 1903 「日本文法論」宝文館
- ALFONSO A. 1971 「Japanese Language Patterns」上智大学 L.L. Center of Applied Linguistics

「付記」ALFONSO 1971のVOL 2をあとでみた。そしてその
“Lesson 26. MORE ABOUT THE PARTICLE MO”

が、いままでの研究のなかで、もっとも重要なもののひとつであることを知った。